信念を貫く者

G-qaz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
信念を貫く者

【Ｎコード】
Ｎ８３９１Ｘ

【作者名】
Ｇ－ｑａｚ

【あらすじ】
目が覚めたら大自然。さらに自分の記憶も無い。
顔を見れば、あれ？この顔は…
さぁ青年はこの先どうなるのか。作者も分からない。

第０話

青年は目覚める
そこは広大な自然に囲まれた世界

第０話
～目覚め～

ー主人公ｓｉｄｅー
「ん…」
硬い土の感触を体で感じながら、俺は目を覚ました。
体を起こして周りを見てみると、
「どうなっているんだ、これは…」
あたり一面、森、山、森、山。上を見てみれば広大な蒼穹。
どこの大自然だここは。
しかも、そばには日本刀のような剣が刺さっているし。鞘どこだよ。
というか、なぜ俺はこんな場所にいるんだ。

「えっと…昨日……はっ！？」
思い出せんっ。
というより、俺は誰だ？
「ぐっ」
記憶をたどろうとすると込みあがってくる不快感に顔をしかめる。

これは、やっかいな事態だな。自分が何者なのかも、ここがどこなのかもわからん。
すると、
『ギャオオオオオォォォォォォッッッッ！！』
なにかの鳴き声なのか雄たけびなのか聞こえてきた。

「……本当にどこだよ。ここは」

第０話（後書き）

はじめまして。Ｇ－ｑａｚと申します。小説を書くと言う行為など始めてが多い作者ですが、暖かい目でご覧になってください。執筆を始めた手前、何とか完成までさせたいと思っています。読みにくいとは思いますが、楽しんでいただけたら幸いです。

第1話

青年は己を知らず
窮地だけが彼にもたらされる

第1話
～現状～

ー主人公ｓｉｄｅー
とりあえず、動かなきゃ話は始まらんので刀を肩に担いで、散策してみることにした。
道中、でかい足跡やら木々がぶった押されている跡やら食われた残骸みたいなものを発見し、俺が住んでいたと記憶する場所ではないと確認して、若干鬱になりながら進んでいくと馬鹿でかい湖を見つけることができた。
俺にも幸運が残っていたことが分かって、すこしうれしかった。

そして、湖に食える魚でもいるかの確認と水を飲むために、湖に顔を移したら、

「この顔は…」

まぁ、なんというかぶっちゃけ、る○○に剣心の斉藤一みたいだよ。
この顔。
記憶に残っている顔より若干目とかが柔らかくなっている気がしないでもないが。
んじゃ、名前もそこから取るか？名前がなくては不便だろうしな。
ふむ。なんか牙突とかやってみたくなるな。と担いでいた刀を構えてみたりしてみる俺。

そこで気づいた。俺は、刀というものに忌避を感じていない。
刀に慣れている奴だったのか？俺は。

ズゥゥゥン！ズゥゥゥン！

「っ！」
考え事をしていたらなにかがすげぇスピードで近づいてきやがるな。
はぁ。ろくに自分のことも分からないのに、厄介ごとはどんどんきやがるみたいだな。

刀を持ち直し、音のするほうへ体を向ける。
「さて、なにが出てくるのやら」

あれ？俺戦闘とかできるのか？？

第2話

青年を狙うは自然界の強者
そこにあるは弱肉強食の世界のみ

第2話
～俺の名～

『ギャオオォォォッッッ』
振り下ろされる大木を思わせる腕とその先にある鋼鉄のような爪。
キィンッ
それを弾きながら後ろに飛びのく青年。
『ガァァッッッ』
それを追い、開かれる顎が獰猛な牙を見せ、青年を襲う。
「うわぁぁぁ！」

～時を遡る事少し～

ー主人公ｓｉｄｅー
「おいおい。やばいんじゃないの？これ」
戦闘ができるのか否かわからないことに気づき、更に、遠くに見えるは木々をなぎ倒しながらこちらに向かってくるでかい何かと、それに追われている動物の影が見える。

俺の持ち物は、なぜか違和感を感じない刀ひとつのみ。

……

……

……

……

よし、逃げるか。

そう考えがまとまったとき、

『グワァァッッ』

ちょうど木々が開け、この湖が見通せるところででかい何かが、でかいイノシシを喰らう所だった。

おいおいおいおい、速すぎるだろ。さっきはもっと向こうにいたじゃねぇか。

ふと、でかい何かの全貌が分かった。太く長い尾。太く岩のような胴体。ギラッと光る爪を持った手。そして、今イノシシをむさぼっているでかい口と牙。

……えっ？竜？

俺がそんな風に呆けていると、

竜はイノシシを喰らい尽くしたのかいつの間にかこちらを見ていた。

そして冒頭に戻るわけだが、

「うわぁぁぁ！」
必死によける俺。空を切る竜の牙。
「はぁっ。はぁっ」
やばいな、これは。このままじゃ喰われちまう。どうすればこの状況を打破できるんだよ。
必死に竜の攻撃をかわし、弾き、食い止めながら考える。

「ん？」
そうしているうちに、ふと気づく。今俺は何をしている？
竜相手に防戦一方とはいえ戦っている。戦えている。俺は戦えている。

ドクンッ
意識した瞬間、体の感覚が研ぎ澄まされていくのを確かに感じた。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

それは違和感とでも言うべき感覚。先ほどまでの竜が捕食するための攻撃を与え続けていただけの光景。しかしその光景に違和感が生

じる。わずかな違和感。それは急激に戦況を変えていく。
竜はただ捕食する側であった。そして、その違和感に気づきながらも攻撃をやめず、その爪を揮った。
その爪は刀に難なく弾かれた。
次はその顎を開き、獰猛な牙を青年に向けた。
しかし、それを青年は竜にすさまじい速度で向かうことでよけたその瞬間。

竜の片腕が宙を舞った
『グワァァァァッッッッ』

竜は何が起きたか理解できなかった。ただいつも通り捕食しようとしただけ。今回は少し時間がかかっているが、それだけのはずであった。
この場所において頂点の位置に属する竜にとって、今この状況は理解不能な出来事であった。

ー主人公ｓｉｄｅー
感覚が研ぎ澄まされる。体が自由に動く、どう動けばいいのか分か

る。竜に向かうことでその隙から腕を切り捨てた。俺は戦える。

振り返ると竜が雄たけびを上げている。もはや、勝てない相手ではないと、体が言っている。

そして、構える。

突き。

自然と構えはこうなった。体から力があふれる。負ける気がしない。

『ギャオオオォォォォッッ』

竜が向かってくる。
だが、
俺はただこれを放つだけだ。

「はぁっ！」

ゴォッ！
放たれた突きから、凄まじい気が直線状に放たれ、竜を穿った。
後に残るは、突き穿たれた竜の屍だけとなった。

構えを解き、一息ついて、

「ふぅ…。よし、決めた。…俺の名はハジメにするとしよう」

やはりしっくりきた。

第2話（後書き）

とりあえず、完成した分を投稿しました。
原作にはまだ遠いです。
書くというのは大変ですね。他の作家さんを尊敬します。ではまた。

設定（前書き）

主人公設定でも。

設定

登場人物

ハジメ・サイトウ

斉藤一のような顔をしている。目つきなどは柔らかい。

自らに関する記憶を失っており、目覚めた世界と自分がいたであろう世界との際に戸惑っていたが、竜を殺した件をきっかけに弱肉強食の世界に順応している。

完全な記憶喪失と言うわけではなく、一般常識など生活する上で必要な知識は有している。

牙突などが使えるのは、ハジメ自身が不思議に思っていることで、体自体が様々な技術を覚えており、ハジメはそれを何回もイメージや、実際にこなすことで、ハジメ自身が理解し使えている。（※その理由は一応考えていますが、作中に出すかは未定です。）

性格などはまだ少し野生に解き放たれたような常識人みたいなことを想定していますが、この後の話でまた変わってきたりすると思います。もう少しでハジメの信念の話しをしますので。（作者の技量・構想不足でグダグダになるかもしれませんが。）

身体能力は異常の一言であり、気を含めてラカン以上である。

以上が主人公の設定となっています。

設定（後書き）

お気に入り登録がされていて、驚きと嬉しさが到来しています。ありがとうございます。
次回早く投稿できるよう、構想中です。
ではまた。

第3話

鍛錬の日々は青年を強者とした
交錯する運命は青年に何を求める

第3話
～到来する者～

ー主人公ｓｉｄｅー
あの竜と戦って数ヶ月が過ぎた。あの感覚を忘れぬように、日々鍛錬をしている。
そうして、鍛錬をしていて気づいたことがいくつかある。

まず一つ。
この体は十二分に頑丈、性能を誇っているということ。驚いたことに、一日ずっと走り続けたり、素振りなどを行っていても翌日には平気という頑丈さ。更に、走ったりするときも、その速度が記憶にある足の速さというものを覆す速さなどなど、驚きの身体能力を持っていた。

二つ。
体が技術を覚えている。鍛錬をするにいたってどのようにするべきか考えて、とりあえず素振りや走り込みなどをしていると、自然と体がどのように動いていたかがイメージとして明確に浮かぶのだ。これのおかげで鍛錬の際、技術の習得が思う以上に捗った。言ってみれば、体が覚えている技術を頭に刻み込んだということだ。

三つ。
いわゆる気が使えるということだ。竜と戦ったとき最後に放ったも

のが気を使ったものなのだが、気を使うと身体能力も技も全てが格段にあがる。竜に風穴を開けたのもうなずける。今は制御に集中し、十二分にできたら、他の鍛錬方法もと考えている。

まぁ、この体がとてつもなくすごいということと、戦える力を手に入れたということだ。この付近で戦いを挑むような生物がほとんどいなくなったしな。

さて、今日の獲物は何にするかな。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―???ｓｉｄｅ―

「はぁっ、はぁっ、はぁっ」

畜生っ。まさかこれほどまでに深く奴らがつながっているとはな。しかし、ばれちまうとは。俺も未熟だったと言うことか。だが、そのおかげでやっと手に入れたこの情報。なんとしても、守り抜かなければいかん。やつらの思い通りになどさせてたまるか。

「いかんなぁ。あまり私の手を煩わせないでくれたまえ。溝鼠君…」

「なっ！」

しまった。もう追いつかれたか！

「死にたまえ…雷の斧（デイオス・テユコス）！」

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－主人公ｓｉｄｅ－

俺の倍はある動物がその体を地に倒す。

さて、今日の獲物の仕留め完了。

「ん？」

何かがこの付近に侵入したみたいだな。珍しい。しかも範囲が小さいから竜とかじゃない、この大きさは人とかか？

だとしたら面白いな。この世界で目覚めてからは近くの村人ぐらいにしかあっていないからな。

しかも、せいぜいが獲物の角や牙を村に卸すぐらいの交流だからなぁ。

仲良くなったのは、龍だけだな。

そう、龍。とんでもないのが前来たんだ。まぁ一回戦って仲良くなってな。話すと思いのほか気があってな。

そう、考えを脱線させていると、まるで雷のようなものが落ちたような音があたりに響いた。

「っ！」

今のはなんだ！？気とは違う気がしたが。竜のブレスか何かか、とりあえず行ってみるとするか。

―side end―

―???side―

「ほう。今のを防ぎきるか。ただの溝鼠ではない…か」

「くっ」

今のは、古代語魔法か？軽々と使うあたり、結構な使い手が追手としてきたということか。

逃げ…きれんな。逃がしてくれるとは思えねぇ。実力はおそらく攻撃はあちらのほうが上。防御すれば何とかなるか？

とはいえ、こちらの防御を抜けるような魔法を使える可能性も十二分にある。まずいな。この情報はなんとしても闇に葬られるわけにはいかん。どうする…。

「ふむ。それをこちらに渡してくれれば、君を見逃してもいいのだがね」

「そんなことできるかっ！これは世界を変えるために必要な足がかりだ。…それに、見逃してくれるとは思えねぇんだがな。」

「その足がかり。あっては困るのだがね」

「紅き焔（フラグランティア・ルビカンス）」

「ぐぅっ、氷楯（レフレクシオ）！」

「…吹きすさべ南洋の風！雷の暴風（フレット・テンペスターズアウトリーナ　ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス）」

「なっ」
やべぇっ！
「くっ！ぐわぁぁぁぁっ」

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

あたり一面が焦土と化した中、
「ふむ。消えてもらえたかな？」
辺りを見回す、男の追っ手であろう紳士風の男
「ぐ、ぐぅぅ」
「おや、生きていたか。魔力全てを障壁に回したのかね？」
「まぁ、ここでどのみち死ぬのだがね」
静寂な中を追手の男の足音だけが響く。
瀕死の男に近づく追手の男。
そのとき、
「よう。こんなところで何してんだ？」
介入者が、現れた。

第3話（後書き）

作ると言うのはどの分野でもやはり大変ですね。
次回もなるべく早く投稿したいと思います。ではまた。

第４話

青年は誇りと信念を知る
そして、青年の運命は加速する

第４話
～理由～

―悪魔ｓｉｄｅ―
「よう。こんなところで何してんだ？」
む。このような場所に人間がいるとは。しかし、これほど接近され、声をかけられねば気づかないとは…。私も耄碌したものだ。

「いや、なに。溝鼠を始末していたところだよ。狩場を荒らしてしまったのなら詫びよう。」
ここは龍すら住み着くような場所だ。それなりに実力があるのだろう。

「まぁ、別にいいが。俺が聞きたいのは、そうじゃなくっ」

「このような相手に随分と本気を出してるようじゃないか。人間もどきが。」

「なっ」
いつの間にか人間は鼠のそばに。まったく見えなかった。この私がか。

「ぐっ。すまん。理由は…後で話す。た…助けてくれ。」

「ちっ。まだ、喋れたか。」
まずいな。実力が把握できん今、迂闊に動けん。
「ふむ。こちらの弱っているほうから事情を聞くとするか。ではな。」
そう言って、介入者は鼠を担いで消えてしまった。
「はぁ。全く…とんだイレギュラーだな。面倒なことだ。」
そして、ニヤリと笑い、
「だが、面白くはなりそうだ。」

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－主人公ｓｉｄｅ－
とりあえず、怪我してた奴を連れて来たわけだが、相対していた奴がこうしたのだろうな。あれがおそらく悪魔だろう。気が禍々しかったしな。
「おい、大丈夫か？回復の魔法は使えるか？」
しかし、改めてみるとひどい怪我だ、左半身がひどい、特に左腕なんか焦げて炭化してやがる。これが魔法とやらの威力か。
「ぐっ。魔力は…殆ど残って…いない。」
「それよりも…話を聞いて…くれないか？」
そういうと男は、手から何かの端末のようなものを出した。
「これは？」

そう聞くと男は、
「この世界にはびこる腐った奴らと、世界を滅ぼしかねない組織の情報だ」
「なっ。なんでそんなものを貴様が？」
「俺は、ライルと言う情報屋だったんだが、ある人に頼まれてな…。最初は腐った奴らを消して、この世界がよりよくなるようにって思ってはじめたわけだが…」
男は、自身の怪我を見ながら、
「とんでもないものが出てきちまったわけだ。」
それから男の話を聞くと、この世界の裏、元老院や連合の裏や、帝国側とやらの裏。そしてその2つにもぐりこんでいるらしい存在の影を感じ取ったらしいが、それまでだった。そこで、先ほどの悪魔に追われ、ここまできたらしい。
「だが、もう限界だ。悔しいがな…体がもうボロボロだ。」
「…お前に頼みがある。」
そう言って、端末を俺に差し出す。
「これを託されてくれないか？」
「本気か？」
正気とは思えん。こんな場所であっただけの俺に、そのようなものを渡すだと？
「はは。なんかな。気に入っちまった。お前の雰囲気がな、知り合いに似ていてな。」
「あいつは、自分の信念のまま逝っちまったが、俺はどうかな。ど

う思うよ。」

「少なくとも、俺は貴様に信念と誇りを感じた。生半可な気持ちで国に、世界にこうは挑めん。」

俺はそう感じた。聞いていて、なぜそこまでして挑めるのか。怖くはなかったのか。

聞きたいことであったが、この顔を見るとそれを聞くことはなぜか躊躇われた。そして思う。俺にはこのような思いが、信念があるのかと。

ふと、近づいてくる気を感じ、

「ちっ、あの悪魔が近づいてきているな。」

「なっ。逃げろっ！あの悪魔はおそらく爵位もちだ…。勝てるわけがない、こいつを持って逃げろっ！」

男は端末を俺に差し出してそう言うが、

「悪いな。俺にとって、この戦いで何か見つかりそうでな。逃げ出すわけにはいかん」

そう。先ほどの話を聞いてから、心がうずく。熱く冷たい何かが心を奮わしている。

おそらくあの悪魔と戦えば、これが何かが分かる気がする。ならば逃げ出す気になどなれん。

「は？なん」

「ほう。それは何か聞いてみてもいいかね？」

ここにたどり着いた悪魔がライルの声をさえぎり尋ねる。

「信念と誇りだ」

第４話（後書き）

うまくまとめられず、読みにくいです。未熟なのが如実に表れた気がします。
表現力がほしいなと思う今日この頃。ではまた。

第5話（前書き）

この作品は独自解釈、独自設定のもと書かれています。
そのような作品に嫌悪感を抱く方は戻ることをお勧めします。

第5話

青年は彼に憧れた
故に青年は背負う決意をする

第5話
～信念～

―悪魔ｓｉｄｅ―
「信念と誇り…かね？」

「そうだ。俺はこの世界に来てからそういったものには縁がなくてな。考えることもしなかったわけだが、…そこの男に感化されてしまったようでな。」
そう言うと、男は背中にあった剣を抜く。
「心が歓喜に奮えているのだ。悪いな悪魔、手加減し損ねるかもしれん。」

「ふっ。ふはははははは。……なめるなよ。人間風情が。」

「悪魔パンチっ」
身の程を知るがいい。
「雷の斧（ディオス・テュコス）！」

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―主人公ｓｉｄｅ―

飛んでくる拳をかわした瞬間、雷が俺を襲ってきた。
が、俺はそれを切ることで防ぐ。
「はっ」
これぐらいなら、龍のブレスのほうが余程凶悪だったよ。
「貴様…今何をした…。」
「ん？」
なにか、悪魔が驚いているというのは滑稽だな。
「今、魔法を…き、切ったのか。貴様」
「何をそんなに驚く。そんなこともできなければこの場所では生きていけないんでな。」
「くくく。そうか。”そんなこと”か。面白い。」
「ふむ。認識を改めよう。我が名はハイエル・ヴァーグムント。子爵の位を持っている悪魔だ。」
「俺の名はハジメ・サイトウだ。冥土の土産だ、よく覚えておけ。」
「ハジメか。覚えておこう。」
そして構えるハイエル。
「一つだけ言っておくぞ。ハイエルとやら」
そう言って刀をハイエルに向ける。
「何かね？」
「本気で来い。生憎これから放つ技は容赦なく貴様を殺すぞ。」

「ふふふ。面白いな。だが！なめ過ぎだっ小僧！」
異形へとその身を変化させたハイエル。
空気が変わる。まさに一触即発の、戦いの空間。

だが、

これが

俺の望んだ瞬間、世界だ。

ずっと考えていた。俺は斉藤一ではない。だがあの男が生涯かけた信念。

「悪・即・斬」

なぜか、それはとても俺の心を震わすものだった。好んでいるといってもいい。斉藤一の牙突という技もこの体が覚えていただけだ。真に使えているわけでも、ましてや何も分からず、覚悟もないままの俺が使っていいのかすらも迷っていた。

しかし、ライルの信念を誇りを聞き、とても眩しく見えた。心が震えた。

俺もこうありたいと。俺も背負いたいと。
ならば、たとえそれが他人のものであろうとも、この生涯をかけて

誇るべきものならば、俺は。
背負って見せようじゃないか。「悪・即・斬」その信念を。
見せてやろう、ハイエル。本気の牙突を。
俺の牙突(信念)を…見せてやろう。

―side end―

そのときは訪れた。ハジメが構えたその瞬間、ハイエルがその膨大な魔力を一気に放出し、ハジメの目の前に迫る。
が、
「うぐぁぁぁっ！」
次の瞬間の光景はハイエルの攻撃に合わせたかのように牙突を放ち、ハイエルの胸を貫き穿つハジメの姿であった。

―ライルside―
な、何が起きたんだ。
ハイエルが、まさに悪魔のような異形の姿となり、それにハジメが構えた瞬間にハイエルが消えたようにしか見えなかった。
そして気づけば、ハジメの剣はハイエルを貫いていた。

ハイエルの後ろの森がなぎ払われてやがる…。
はは。強すぎだろ。爵位もちの悪魔を一撃…か。

「くく。ははは。」
笑い出すハイエル。
「私が手も足も出んか。」
体が塵になっていき、消えていくハイエルが口を開く。
「なに。貴様が弱かった。ただそれだけだ。」
それに応えるハジメ。悪魔を弱いと断言してやがる。

「はっはっはっは。そうか。私が弱いか。だが、世界を相手にどこまでその強情が貫けるのかな？楽しみだ、とても。」
見れないのが残念だがね。そういい残し、ハイエルは消えた。

「死ぬまで貫くに決まっているだろう。「悪・即・斬」の信念とともにな」

どうやら、俺は死に際にすげぇやつに出会ったらしいな。まさか、こんな奴に託せるとはな。

「おい、ライル。まだ生きているか。」

「ああ。なんとかな。それにとんでもないものも見せてもらったしな」
なんだよ。魔法を切るって。突きで森をなぎ払うなよ。無茶苦茶だ。

「お前の信念。確かに託された。安心して逝け。」

はは。偉そうだよなぁ。お前。

まぁ、本当に安心だなぁ
実はもう眠くてしかたねぇんだ。

「あぁ。任せた…ぜ……」

―side　end―

―主人公side―
さてこれぐらいで十分か。墓を建てるといっても墓石と花を用意するぐらいだからな。

後は、龍に別れの挨拶をし、まずは近い街から出発するとしよう。

ライル。託されたこの情報だが、自由に使わせてもらうぞ。
世界を変えてやろう。「悪・即・斬」のもとにな。

「さて、行くとするか。世界を相手にするために。」

第5話（後書き）

もうすぐで戦争編に入れるかな、たぶんハジメは裏方ですが。原作は遠いです。そういえば、原作キャラまだ出てないや…。
未熟なのは十分承知のことですが、完結だけはさせたいと思います。
ではまた。

第6話

青年は旅に出る
全ては未知の出来事

第６話
～始まり～

ー主人公ｓｉｄｅー
ライルから渡された情報から一番近い街に来たが、街には活気がある。
裏通りは知らんが、なるほど。少し偏見を抱いていたようだ。上の人間が腐っていても生活するものは逞しい…か。
情報によるとゴルド・サージェンと言うらしい。なるほどこいつは連合とやらとつながりがあるらしい。
とりあえずは、標的がどのようなものか聞き込みをするとしよう。

「すまん、ちょっと聞きたいことがある」

……
……
……
…

「ふむ。なるほどな」

あらかた聞き込みを終え、少し休憩することにしたが、ひどいものだな。

私腹を肥やした豚の典型だ。ライルが懸念していた組織の繋がりは分からんが、それは奴の書斎なり何なりにあるだろう。

さて、遠慮は要らんな。今夜決行することとしよう。

……

……

…

難なく忍び込むことに成功し、今こうして屋敷に侵入して、月明かりに照らされる廊下を、歩いている。

屋敷の情報は情報屋から仕入れて、迷うことなくゴルドがいるであろう書斎に向かっているわけだが。

「なんだ。この警戒のなさは…」

呆れてものも言えん。

「ここか」

中から人の気配がする。当たりだな。

さて、感覚を切り替えるとしよう。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

書斎の扉が開かれる。ゴルドは扉の方向を向いた。

「誰だね、こんな時間に。無礼な」

だが、扉の向こうには誰もおらず。

「ん？」

その瞬間、

「ゴルド・サージェンだな。」

ゴルドは後ろから聞こえる声と殺気に戦慄する。

「ひっ。だ、だれっか…」

助けを呼べるはずもなく、何がおきたか分からないまま、ゴルドはこの世と別れた。

ー主人公ｓｉｄｅー

さて。ゴルドを片付けたわけだが、こいつがどんな繋がりを持っているか確認するとしよう。他にも有益な情報を持っているかも知れん。

……

……

……

…

ちっ。特に目新しい情報はないな。というより、この屋敷に人がいなさ過ぎる上に、資料から察すると、ゴルドは連合の末端だったようだな。

ライルが懸念していた組織の情報も分からなかったか。

まぁいい。残念ながら、他にも悪即斬のもとに狩るべき獲物が、山ほど残っている。この組織とやらが分かるのは、そう遠くないはず。必ず突き止めて見せよう。

必ずな。

第6話（後書き）

いきなり中枢とかに行ける訳がないので、つなぎの様な話です。
このような話でも面白く書けたら良いでしょうに。日々精進、でも忙しい。ではまた。

第7話

舞台は整い始める
その脅威はいまだ認識されず

第7話
～世界～

―完全なる世界（コズモエンテレケイア）ｓｉｄｅ―
「はぁ。これで何人目だろうね。」
そう呟いてアーウェルンクスは今届いた資料を机の上に置いた。

「今話題の、政治家殺しか？」
デュナミスがアーウェルンクスの呟きに反応する。

「そうだよ。もう少し早く起きていたら、死んでいた人数も多かっただろうからね。そうなっていたら、僕たちの計画に支障ができていたね」

「そうだな。だが、現状特筆すべき支障が出たわけでもない。まぁ、操るべき人間が減ったというのは、操作がしにくいと言うことに繋がるが…支障というほどのことでもあるまい。」
「もう計画は始動している。後はどれだけこの戦争を長引かせるかだ。もし件の奴が邪魔すると言うならば…」

「そのとき、叩き潰せばいいだけのこと」
そう言って、デュナミスは資料だらけの部屋から退出していった。

「ふぅ。まぁその通りなんだけどね。しかし、政治家殺しか。僕たちと繋がっている人間もちらほらいる。偶然…なのかな」
アーウェルンクスは天井に目をやり、思考にふけていった。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―Ｍ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）ｓｉｄｅ―
「まだつかまらんのか！このふざけた殺人鬼はっ！」
机をたたきながら憤慨している老人。

「１００万ドルもの金をかけたのだぞ。暗殺者というのならそれほど強くないのではないのかね？」
「全く。我等を何だと思っておるのか。」

「申し訳ありません。しかし、顔も特定できていない相手に…」
老人たちを相手にしているであろう若い職員が平伏している。
「黙れ！」

「はぁ。賞金稼ぎもボディーガードも全く役に立たんな。」

「ぐっ」
職員の後ろに控えているＭ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）と関係があるのであろう賞金稼ぎらしきものたちが顔をしかめる。
名のあるギルドや賞金稼ぎがもうすでに何人もやられているのだ。
言い訳もできない。

「とにかくこの男。至急に再手配だ。賞金額は倍の２００万ドルにしておけ」

「我等の命を狙っているのだ。早急に事態の収拾を頼んだよ」
「はっ。分かりました。全力を持って取り掛からせていただきます。」
職員と賞金稼ぎたちが部屋を去っていく。

「しかし、顔どころか、名前も分からんとは。」
「厄介ですなぁ。帝国との戦争もあるというのに。」

「そうじゃ。戦争じゃ。どこからか英雄となるような者を探さんとな」
「ふむ。それならば…」
そうして、老人たちは次の議論へと移っていった。

……
…
（「殺されている者全員が……。どういうことじゃ？……あって見ぬことには分からんのぅ」）
幾人かを除いて…。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―帝国ｓｉｄｅ―
「ふむ。連合でもあったということか」
威厳を纏った王のような存在が喋った。
「はい。ですが、やはり件の男の有力な情報は無いようです。」

それに応える人間のような姿の男。

魔法世界人。
古き民と呼ばれ、角やとがった耳などの特徴がある存在。
彼らにとっても政治家殺しは他人事ではなかった。

「ふむ。ならばそちらに手が届くように、この戦争速く終わらせる必要があるかも知れんな。」

「使いますか？鬼神兵を」

「まだ早い…が、準備はしておけ。」

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

仕組まれた戦争は始まる。
様々な思惑が入り混じった戦争は終わりを知らず。
ハジメの行動がこの先どのように戦争を世界を左右するか、
誰も…知らない。

第7話（後書き）

日間ランキングに載ってる…。こういうものを見ると嬉しく感じますね。思わずニヤリとしてしまいましたが、その場面を友人に見られてしまいました……。

戦争編佳境に入ったら面白くなるかなぁ。頑張りたいと思います。

お楽しみいただけたら幸いです。ではまた。

第8話

人は一人では無力
青年は盟友を得る

第８話
～盟友～

－主人公ｓｉｄｅ－
裏通りに入り、目的の場所へとたどり着いた。
古びた隠れ家のような雰囲気を持つ店だ。
扉を開けると、子気味よい鈴の音が来店を知らせる。
「いらっしゃい。」
初老を迎えた、温和な顔の店主がこちらを向く。開店したばかりなのだろうか、店内には誰もいない。

「古い知り合いと会うんだが、なにか新鮮なものはあるか？」
そう言って、半分に欠けた銀貨を店主に渡す。

「はい、ございます。奥の席へどうぞ。」
銀貨を受け取りそう言うと、店主は出口へ向かい扉にＣＬＯＳＥの札をかける。

奥の席に座り、少しの間待つことになった。

最近はもう手放せなくなった煙草に火をつけ肺で煙を味わう。
「ふぅ。」
吐き出した紫煙があたりに漂う。

…

……

……

ライルから渡された情報を手がかりに、私腹を肥やした豚、闇商人、様々な奴らを狩り殺してきたが、未だその闇は知れず。

完全なる世界（コズモエンテレケイア）

ライルが黒幕であろうとふんだ組織。その名だ。だが、その目的が一切分からない。

最初は帝国とM・M（メガロ・メセンブリア）の中枢に入り込んでいるらしいと知って、武器商人と手を組んで稼ぐための戦争を仕掛けているのかと思いきや、今や下手したらこの先、ただ世界が滅びるまで戦争をするのではないかというほどに、戦争は激化の一途をたどろうとしている。

腐った奴らをいくら屠ったところで、また新たに腐った奴らが這い出てくるだけ…。やはり、奴ら完全なる世界（コズモエンテレケイア）の真の目的を知らないことには、始まらんか。

オスティアの奪還。これが帝国の侵略の理由らしい。

ふむ。やはり、オスティアになにかあるやもしれん。ライルの情報には欠けていたものだ。これだけ世界を巻き込んだ戦争だ。無関係なはずが無い。

オスティアに探りを入れるか。だが、情報がない。やはり、独りでは戦うことはできても謀略の類を征することは無理があるな。まぁだからこそ今日、ここに来たわけだが。

……
……
……

席に座って待つこと十数分経ったところで、向かいの席に男が座る。
「始めまして。マクギル元老院議員の秘書をやらせてもらっています。クーラと申します。あなたが今話題の政治家殺し　【パイルドライバー】　でよろしいですか？」

さて、待ち人が来たようだ。
「ああ。そうだ。ここに来たと言うことは、契約は成立ということでいいな？」

「はい。資料はここに。それでは失礼します。」
資料と思われる束と、情報端末を机の上に置き、去っていく秘書。

……
……
……

オスティアがどのような立ち位置にいるか、『完全なる世界』との関係者の有無。それを知るには手元の情報では不可能。ならばどうするか。

協力者が不可欠だ。情報屋では駄目だ。情報と言うものはありとあらゆるものが売れる。信用すらも。俺の情報を少しでもばら撒くの

は、これから先やりにくくなる可能性があるため却下だ。
ならば一蓮托生。俺の盟友、主足りえるものを探すほうがよい。それが政治家ならば特にな。
政治家の情報ならば、今まで屠ってきた連中の情報から連中が疎ましく感じている者を探せばよい。

そして、出てきたものがマクギル元老院議員。調べればなるほど。盟友足る存在であった。
ならば、こちらから出向く。そして、奴にこちらが知る情報を渡し、こちらの思惑、奴の理想、それらを話し合い、今契約を結ぶことに相成ったわけだ。

……
……
…

次の俺の戦場はオスティアか。どのような奴らがいることやら。

―side end―

―マクギルside―
まさか、あちらの方から来るとはのぅ。
それにしても今でも震えるわい。ハジメの立ち振る舞いはまるで暗殺者じゃな。実際そうじゃし。
しかし、M(メガロ・メセンブリア)・M内にまさかそのような組織とつながりがある奴らが

居ったとは。『完全なる世界』のぅ。奴らの目的とはいったい何なんじゃろうな。

…

……

……

そもそも、なぜわしがハジメと契約を交わしたか。ハジメと敵対しなかったのはじゃ。

ハジメの行動に違和感を感じておったからじゃ。

わしがハジメの行動に違和感を感じたのはある情報からじゃ。ハジメが殺した役人。この役人についての情報が、わしの秘書から知らされた。着服、癒着の類じゃな。そして、秘書にハジメが殺してきたとされる者たちを調べてみると出るわ出るわ不正や汚職の数々。げんなりしたわ。

だからわしはできればハジメに会いたかったのじゃ。協力できると思ったんじゃなぁ。そしたら来るんじゃもん。吃驚したわ。

ハジメの信念『悪即斬』。その信念にわしが切られぬ限りわしらは協力できるじゃろう。できれば一生協力したいもんじゃ…。

……

……

…

ノックの音が響く。

「誰じゃ？」

「私です。ただいま戻りました。」

ふむ。ハジメに資料を渡しに行った秘書が戻ってきたようじゃ。
「うむ、入ってよいぞ。ご苦労であったな。」
さて、ではわしも頑張ろうとするかのう。

―side end―

政治家殺しのニュースは世界中に届いていた。
そして、民衆の興味を引いたのはその死体の異様さであった。
襲撃された政治家たちの死体にはどれも同じような傷があったためだ。
その傷は胸に風穴が空いているというひどいものだった。
それはまるで太い杭打ち機でも使って無理やり穿ったような傷跡だったため、件の者はこう呼ばれる。

【パイルドライバー】

と。

第8話（後書き）

はい。盟友とは爺でしたね。違うキャラを期待した方、すいません。いい通り名とか思い浮かばない。パイルバンカーと悩みましたが、ボトムズだし、魔法世界にあったらおかしいだろうと杭打ち機にしました。どっちもあったらおかしいですかね？壬生狼？どう広めろと。

始めの店主との会話は適当です。ただ、半分に欠けた銀貨を渡す事で、密談したいから部屋を用意してもらい、もう半分の銀貨を持った者を部屋に案内してもらう。という暗黙のルールがあった、という裏設定です。すみません。こういうの好きなんです。

たくさんの方に読まれているようで、とても嬉しいです。頑張ろうという気持ちになります。ではまた。

第9話

青年は紅き翼を知る
紅き翼はただ自らの意思で飛ぶ

第9話
～紅き翼（アラルブラ）～

「た、頼む。金ならいくらでもやる。だ、だから命だけはっ」
「…貴様の様な屑は、早々に死ね。」
何かを砕いたような音が暗闇の中に響き渡る。

「ふん。」
頭が砕かれた骸を、ハジメは無造作に投げ捨てる。
すでに臥していた他の骸とぶつかり不愉快な音が木霊する。

そしてハジメは、手馴れた手つきで咥えた煙草に火をつける。
「ふぅ。」
吐き出された紫煙と共に、ハジメは闇の中に消えていった。
地獄絵図とも言える闇の中へ…

…
……
……
……
…

―紅き翼ｓｉｄｅ―

ここはオスティアのとある街。その一角にある飯屋。

「全く、これで何十人目だ。」
黒髪の剣士が新聞を見てぼやく。
「あ～？あぁ例の政治家殺しか。爺どもも見つけたら倒してくれって言ってたなぁ。」
赤毛の鳥頭が剣士のぼやきにそう応える。
「ええ。彼らからしたら、いつ自分の身に降りかかると知れない災厄ですからね。」
「後ろ暗い奴は怯えておるじゃろうなぁ。」
ローブの男と爺さんのような口調の少年が鳥頭に続く。

……彼らは紅き翼（アラルブラ）。連合側についているいわば傭兵のような者たちである。
「確かになぁ。姫子ちゃんのこともあるしな。」
赤毛の鳥頭はナギ・スプリングフィールドと言い、膨大な魔力を有した魔法使いであり、紅き翼のリーダーでもある。
「オスティアの姫御子ですか。そうですねぇ」
ローブの男の名はアルビレオ・イマ。にこやかな顔をして何を考えているか分からない魔法使い。
「まったくだ。」
剣士の名は近衛詠春。生真面目そうな剣士である。
「まぁわしらが議論していてもパイルドライバーは捕まるまい。顔もはっきり分かっておらんしの。」
少年の名はゼクト。口調は爺のようで、見た目は少年の不思議な者である。
以上の４名で構成されている集団である。

「しかし、パイルドライバーかぁ。つえぇのかな。やってみてぇなぁ。」
ナギがそういうと、
「風穴を空けられるぞ？」
詠春がそう返す。

「ははは。しかし、なんで戦争には出ねーで、裏でこそこそやってんのかね？そいつ」
ナギが疑問を挙げる。
「さぁ？少なくとも私たちの知れる範囲のことで無いのは確かです。」
アルビレオが笑顔と共に返答する。
「わしらの知らん戦争の裏とやらがあるのかも知れんしな。どっちみち知りたいならば、会わんことには始まらんじゃろ。」
ゼクトがそれに補足する。

「それもそうだな。お、飯が来たみたいだぜ。いっただき～す。」
「あまりがっつくな、ナギ。」
そうして彼らは食事を始める。彼らを見ている者に気づかずに。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－主人公ｓｉｄｅ－
あれが紅き翼…か。なるほど。マクギルが推すだけの事はある。
あれだけの戦力ならば、Ｍ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）もそう手放したくはないだろうな。

しかし、オスティアに来てから情報収集に重きを置いて行動してきたが…。完全なる世界（コズモエンテレケイア）について調べる上で、まさかオスティアでＭ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）

Mが出てくるとはな。そして、重要なファクターであるらしいオスティアの姫御子。そして、この戦争の発端である帝国のオスティア奪還への侵攻。

まだ、ピースは足らんがここオスティアが重要な意味を占めるのは明白だな。完全なる世界（コズモエンテレケイア）も動いているようだしな。

そして、それらを含めた情報を考察すると、オスティアのトップまたはそれに準ずる者が怪しいと考えられる。

…全く、完全なる世界（コズモエンテレケイア）はどこまで入り込んでいるのやら。ここまでくるとライルの情報も氷山の一角でしかなかったということか。

さて、オスティアの上層部か。どこまで黒いのやら。それに完全なる世界（コズモエンテレケイア）の目的も知らんとな。まさか、本当に世界を転覆させるつもりかもしれないな。いずれ分かることか。

では、行くとするか。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―マクギルｓｉｄｅ―

むぅ。困った…、困ったのぅ…。

ハジメの情報や、わしの情報を照らし合わせれば帝国が次にオスティアを攻め込む際は、以前より更に戦力を拡大して侵攻してくるようじゃ。

いくらオスティアといえども、厳しいものがあるはずじゃ。新進気鋭の紅き翼が今オスティアにいるとしても、不安じゃ。

ハジメも捜査や諜報ばかりでなく、表舞台に出てもらいたいものじ

ゃ。奴なら紅き翼以上の働きができるじゃろうしな。

…いい案ではなかろうか。ハジメの今までの行動は恐らく誰も把握しておらんじゃろう。わしも出会わんかったら、分からなかったじゃろうしな。

よし。ハジメに頼んでみるとしよう。決めたなら即行動じゃ。

「お～い。誰かおらんか？」

……

……

…

第9話（後書き）

休みなので、書き上げ中。今日中に、後2話ぐらい上げる予定です。
ではまた。

第１０話

青年は黄昏の姫御子に出会う
そして、青年は舞台へ上がる

第１０話
～表舞台へ～

オスティアの内部を探ろうとハジメは動いた。
しかし、マクギルの緊急の連絡により、本国へ戻ったハジメだったが、
そこでマクギルがいった言葉は、戦場へ出てもらいたいと言うものだった。

ーマクギルｓｉｄｅー
「どういうつもりだ。マクギル」
ハジメは吐き出した紫煙を辺りに漂わせこちらを睨んでくる。
おぉ。この殺気は寿命が縮むのぅ。
「次の帝国によるオスティアへの侵攻を食い止めてもらいたい。と言ったのじゃ、ハジメ。」
場の雰囲気が凍る。
「俺にそのような暇はない。完全なる世界（コズモエンテレケイア）の目的を知るために、後もう少し情報が必要だ。奴らに踊らされているような連中を助ける義理はない。」
「それで無関係のものが死に逝くとしてもかの？」

いくらこの戦争が帝国、連合双方に入り込んでいる完全なる世界（コズモエンテレケイア）によるものじゃとしても、それで死に逝くものはただ、己の正義のため、家族のため、生きるためのものばかりじゃろう。

「…」

ふむ。思うところがあったのじゃろうか。空気がすこし和らいだの。

「それにこのオスティアの姫御子の話。真実だとするならば酷いものじゃ。もしまた、帝国がまたオスティアに侵攻してくるならば彼女もまた、兵器として利用されてしまうのじゃろう。」

「オスティアの姫御子か…。」

何か考え込んでるようじゃのぅ。姫御子になにかあるんじゃろうか。

「…完全なる世界（コズモエンテレケイア）の連中も姫御子を、重要なファクターとして認識を持っているらしい。」

「なっ。なんじゃとっ！」

き、聞いてないぞい。そんなことは！

「不確かな情報だからな。それに貴様が、姫御子についてオスティアに干渉すればバレる可能性があった。」

「うっ」

それも確かにそうじゃ。今まで大して干渉しようともしていなかったわしが出てくれば、怪しまれるのは仕方ないの。

「だが、帝国が侵攻してくるとするならば、姫御子を出すだろう？奴らは。」

「っ！ま、まさか、お主…」

「やはり、実際に会ってみないとな。百聞は一見に如かずという。オスティアの連中の内部もより知れるというものだ。」

そして、ハジメはニヤリと笑った。

な、なんちゅう顔で笑うんじゃ。な、泣いた子供も泣き止むのう…恐怖で。

「では、オスティアに行くとしよう。」

そう言って、立ち去ろうとしたハジメだったが、数歩歩いて立ち止まった。

「ん？まだ何かあったかの？」

「いやなに、オスティアで紅き翼に会った。」

なんと。

「ほう。それで、どうじゃった？」

「鳥頭含め全員が一線で戦えるであろう強さを持っている。だが、」

「だが？」

「俺とは馬が会わんだろうな。まっすぐな正義を信じる奴らだろう。」

それなら、ハジメとはそりが合わんかもしれんのぅ。

「うむ。分かった。」

「ではな。」

そう言って、ハジメは去っていった。

―side end―

…
……
……
……
…

オスティア　―戦場―

「くっ。奴らが来たぞっ！」
ローブを纏った男が叫ぶ。
すると、同じような姿の男たち、中心にいる少女の周りを慌しく動く。
「仕方ない。また役立ってもらうとするか。」
「このような幼子が…。不憫な」
「愚か者が。見た目に惑わされるでない。これは兵器（モノ）と思え。」

「ふぅ。全く。…生きぎたない連中が多すぎるな。ここは。」
そこに突然、剣呑な雰囲気を纏った男が現れた。

「そんなものに頼るぐらいなら、潔く死ねば良いものを。」

その言葉にローブ姿の男の一人が叫ぶ。
「な、何者だ。貴様。傭兵ならば、さっさと戦場に戻れっ」

すでに周囲は帝国の戦艦や鬼神兵が侵攻しており、戦場と化している。
「ふん。そんな無愛想娘に頼るしか能のない貴様のために来たんだよ。分かったら早々と退け」

「はっ。貴様そんな丸腰で何ができると言うのだ。まさか、帝国のスパイか何かか？」
ローブ姿の男がそう言うが、男はそれを無視し、帝国の戦艦や鬼神兵を見通せる場所に立ち、構える。

「おいおい。…最後の警告だぞ。さっさと…っ」
ローブ姿の男が黙った。
構えた男から凄まじい力を感じたからである。

その男の姿を見て、気づくものがいれば気づくであろう。それは感卦法という究極技法（アルテマ・アート）の一つ。
そして男は、その力を解放する。
「っ！」
凄まじい力が指向性を持って帝国の戦艦や鬼神兵を襲う。

「っ…なんと。」
ローブの男が呆ける。
戦艦は黒煙を上げ沈んでいき、鬼神兵をなぎ払った。

ー主人公ｓｉｄｅー
牙突・零式。飛び道具が欲しいと思っていたが、感卦法とあわせると凄まじいの一言だな。賞金首になっている今、表で刀を使うわけにはいかんからな。感卦法の力を刃とし、放つ。使い勝手が良いな。
さて、後ろで呆けている奴らはどうするとしようか。そう考えて振り返る。

と、無愛想娘こと姫御子と目が合った。

「…からっぽだな。絶望もできんか。」

無意識に言葉が出ていた。それほどまでに、無愛想娘の目は空虚なものだった。

目が合って見詰め合うこと数秒、

「今こっちですげぇの見たんだが、誰が使ってたんだっ？」

そこで突然、空気も読まずに鳥頭が現れた。

ここは戦場だぞ。阿呆が…。

「なっ。千の呪文（サウザンド）…」

この阿呆が現れたことで、役人どもが慌ててやがる。

「はぁ。」

思わずため息をつくと、

「お？もしかしてお前だな。（辺りを見渡し）見るからにお前だよな。」

鳥頭が詰め寄ってきた。なんと鬱陶しい。

「黙れ。鳥頭。それより、後ろを見ろ阿呆。まだ終わってはいないぞ。」

その言葉に振り返る鳥頭。

「それもそうだな。よ～し。んじゃさっさと倒しに行こうぜ。お～い、お前ら」

そこで空に声をかける鳥頭。仲間も来ていたようだな。

「ふむ、その無愛想娘をさっさと中へ戻しておくんだな。巻き込まれるぞ？貴様ら」

「くっ。言われずとも。お前らこそ、さっさと倒して来い」

そう捨て台詞を残してローブの男たちが無愛想娘を連れて去ってい

った。

「ん？姫子ちゃん助けてたのか？お前」
そう尋ねてくる鳥頭。

「ふん、馬鹿いってないでさっさと行くぞ。ど阿呆」
「くっくっく。おう。行こうじゃねぇか」

さて、仕事は果たすとしよう。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

紅き翼と一人の男がオスティアの防衛に加わってからは、ただただ一方的であった。
大呪文と気砲ともいうべき拳撃や斬撃に帝国の戦艦や鬼神兵は敗れ去り、帝国のオスティア回復作戦は失敗に終わったのであった。

第１０話（後書き）

ま、まだいける…。

第１１話

青年はとうとう真実に触れる
しかし未だその全貌は知れず

第１１話
　～王と敵～

帝国は敗れ去り、一時の平穏が訪れるオスティア。
平穏な夜の帳の中、ハジメは目的のために城内に入り込んでいた。

－主人公ｓｉｄｅ－
しかし、鳥頭もしつこかったな。全く、酒もろくに飲めなかった。

…

……

……
戦いが終わり、宴があった。と言っても、酒を飲み、飯を食らってただ勝利を祝うものであったのだが。
俺もそこで、久々の休憩をかねて酒を飲んでいたわけだが…、
「なぁなぁ。お前名前なんていうんだ？というか俺と一戦しようぜっ」
この鳥頭が何を思ったか知らないが、やたらと話しかけてきて鬱陶しいことこの上ない。

「静かに酒も飲めんのか、貴様は。」
「いいじゃねぇか。宴なんだしよ」
そういって、満面の笑みで笑う鳥頭。

…っ。

いかんな。思わず手が出るところだった。

「はぁ、黙れ。阿呆が。」

「ははは。すまないな。ウチの馬鹿が、迷惑をかける」

そう言って、こちらに近づいてくる近衛。

「ふふふ。ナギもあなたと出会って、嬉しいのでしょう。」

近衛と一緒に近づいてくるアルビレオ。

「知るか。鳥頭をしっかり管理しておけ。」

「なんだとぉ。俺は管理されるようなちっちゃな男じゃねぇ。俺は無敵の千の呪文（サウザンドマスター）の男だぜっ」

そう言って、派手なパフォーマンスをしだす鳥頭。

「いいぞ。兄ちゃんっ。もっとやれぇ」

そしてそれに乗っかって、ドンちゃん騒ぎをしだす面々。辺りはどんどん騒がしくなっていった。

……

……

…

はぁ。今思い出しても鬱陶しい。まぁ忘れるとしよう。

さて、仕事をするとしようか。

戦いが終わって勝利の余韻を味わっている今。次の戦いへの布石も含め、動く連中がいるはず。警備も緩くなっているため、手がかりを掴める好機。逃すわけにいかん。

しばらく、探っていると、秘書の書斎らしき場所にたどり着いた。
中に誰もいないことと、侵入者用の魔法を全て解除して入る。

ここ最近の王族や渡来してきた役人どもの情報や、金の流出入を確認していく。

……。

あらかたの資料を暴き終わると、ふと机に違和感を感じた。

…これは、隠蔽、認識齟齬系の魔法か？

そして、魔法を解除すると出てきた引き出しの中に入っていた資料を見ると、

「っ！」

完全なる世界（コズモエンテレケイア）に関しての秘書の手記が書かれていた。読む速度を上げる。それらしき組織がいつごろから、どの頻度で来たかなど秘書の感想らしき文と共に箇条書き程度ではあるが、確かに記されていた。そして、最後は帝国が侵攻してくる前。数日前で終わっているが、書かれていることに俺は驚いた。

どうやら、完全なる世界（コズモエンテレケイア）と王族の誰かが近いうちに密会を行うらしい。

…まさか、今日か？ありえない話でもない。

俺は、部屋の状態を元に戻し、部屋から出て行った。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

…王城の裏手、誰も踏み入れないような場所に２つの人影があった。

「言われたとおり、秘書も手記も始末しました。しかし、驚きましたな。まさか手記に残しておったとは」

威厳とも言えるような雰囲気を纏った壮年の男が口を開く。
「いや、始末したならいいよ。僕らの存在を公にするわけにはいかないからね」
もう一つの影は、どこか人形を思わせる雰囲気を纏った青年であった。

「その通りですな。では、これからの話に移るとしましょう。」
「そうだね。」

そして、彼らには見えない位置で一人の男がそれを聞いていた。

ー主人公ｓｉｄｅー
部屋を出た俺は、奴らがいるかも知れん場所を気も用いて探索し、奴らを見つけた。
そして奴らに気づかれんように、十分距離をとった場所で壁を背後にし話を聞いていたわけだが、今聞いた情報を自分の中で整理する。
まさか、先ほどの秘書はもう始末された後だったということか。だが、手記はあった…。どういうことだ？
いや、今は奴らの会話を聞くことに専念しよう。とうとう、完全な(コズモエン)る世界(テレケイア)の奴らの足跡を見つけたのだからな。

「…次は、…紅き翼には退場……にでも…もらおうか。」
「そうですな。あまり……ても困りますからな。…駒として有力な……ですからね。」
…
紅き翼？鳥頭たちの事か。邪魔というのはどういうことだ？
…

「お姫様には……てもらおうか。その……には、君たちも……だよ。」
「しかし、……なのでは？実際に……。」
…
お姫様…分からんな。無愛想娘のことか？
…
「最後に、…についてなんだけれど、何か知っているなら……」
「いえ、ですが……のつもりです」
「っ！そこにいるのは誰だ！」

っ！見つかったかっ！？
仕方ない。逃げるか。

ーｓｉｄｅ　ｅｎｄー

青年が一気に距離をつめ、壁を破壊する。
「…気のせい…だったのかな？」
辺りに気配はなかった。青年は勘違いだったと思うことにし、、
「まさか、奴の仲間でもいたのでしょうか」
壮年の男が問うが、青年は、
「いや、恐らく僕の勘違いだよ」
と返した。
「そうでしたか。珍しいこともあるのですな」
壮年の男は、さも驚いたかのように応える。

「……そうだね。」
そう言って、青年は崩れた壁を見て、夜空を見上げた。
夜空には何かを暗示するかのように、月が輝いていた。

第１１話（後書き）

次話は夜に更新すると思います。ではまた。

第１２話

青年は信念のもとに斬る
斬り去ったものに振り返らない

第１２話
～王殺し～

月の明かりだけが辺りを照らす中、一人の男は佇んでいた。
―主人公ｓｉｄｅ―
煙草に火をつけ、いつものように味わう。
「ふぅ。」
吐き出した紫煙が辺りに漂い、霧散する。

まさか、いきなり当たりとはな…。オスティアが怪しいとは思ってはいたが、上はその殆どが黒いのかも知れんな。
まずは、あそこにいた人物。それとその周りの人間。それで、あの男…完全なる世界（コズモエンテレケイア）のことが分かるはず。

無意識に口が曲がるのを俺は自覚した。

首を洗って待っていろ、完全なる世界（コズモエンテレケイア）。貴様らを表舞台へ引きずり出し、その首切り落として見せよう。

…
……
……

帝国がオスティアを撤退し、早くも1週間が過ぎた。
俺は、オスティアの王族を洗いざらい調べようとしたわけだが、随分と王族と言うものは歴史や文化を大切にするのだな。
恐ろしいほどの資料が王都が管理する図書館に並べられていた。マクギルに出させた許可証を用いて一般では閲覧出来んような資料も含めるとその量は圧巻の一言に尽きる。
オスティアの王族には様々な家系に分かれているらしく、各々がこの王都オスティアの王族としてこのオスティアを支えているらしい。ご苦労なことだ。よく滅びんな。

王族の主要人物を調べているだけでも数日をかけた。そして、あの夜あの場所にいた人物。それがウェスペルタティア王国国王。…国王自らが世界を滅ぼしかねん完全なる世界（コズモエンテレケイア）のような連中と繋がっているとはな。

……もしかしたら、完全なる世界（コズモエンテレケイア）は、何か違う目的を持って動いている？王族のトップが率先して動くのは不自然極まりない。
世界を衰弱させ征服する？まさか。それこそ、今奴らが持っている繋がりを発揮すれば、それこそ世界など意のままだ。

なら、なんだ？…魔法世界…オスティア…帝国…連合…世界を巻き込んだ戦争…、そして…オスティアの姫巫女。
何をするつもりなんだ？完全なる世界（コズモエンテレケイア）は…。

分からんなら…、聞くしかないか。

―side end―

オスティア、王城の円卓に十数人の影があった。
そこでは王族のトップが集まり、あることについて話し合っていた。
……
「…ふむ。順調ではないか。悲願が叶えられる日も近いな」
ウェスペルタティア国王が、嬉しさがにじみ出ている顔で話していた。
「えぇ。『楽園』はもうすぐですな。」
その言葉に他の王族もうなずく。
あることとは、完全なる世界（コズモエンテレケイア）が行おうとしている魔法世界の滅亡と、その救済である『楽園』についてであった。
そして、それらが順調に運んでいて、話し合うこの場の雰囲気は至って和やかであった。
が、
「『楽園』…か。興味深いな。詳しく話を聞かせてはもらえんか？」
そこに男が扉を背にし、傲岸不遜に割り込んだ。

―主人公ｓｉｄｅ―
全く、王族というのは阿呆ばかりか？こんな場所に集まるとは秘密の会合があるといっているようなものだろう。
だが、そのおかげで、こうして奴らに関して聞く機会ができたのだから歓迎すべき事態だ。
「な、何者だ。貴様っ！」
「ここがどこか分かっているのか！？」
老人共が騒がしいな。

「黙れ。俺が聞きたいのは、今喋っていた『楽園』を含めた完全な(コズモエン)る世界(テレケイア)…奴らの目的だ。」
完全なる世界(コズモエンテレケイア)で顔色を変えたか。
なるほど。他の王族は全員国王の手駒であり、目的も知っていると…。なら話は早い。

「大人しく話すなら見逃すが…、抵抗するか？」

「くっ。王家の血をなめるでない。賊如きがっ」
そう言って、こちらに魔法を放ってくる若き王族。

それに対し、俺は腰に携えた刀を振るい、魔法を切る。
「なっ」
そして若き王族へ瞬動で後ろに回りこみ、返す刃でその命を屠る。

一気に静まる円卓。
「貴様らがしてきた事は、把握している。完全なる世界(コズモエンテレケイア)に支援していた事、帝国、連合に入り込んだスパイ、傭兵の事、そして…今回の戦争が始まったとき、貴様らが裏で何をしていたか。楽しかったか？辺境をつぶすのは」

「馬鹿なっ！なぜ計画が知れている！？」
国王が叫んでくる。

なぜ？調べようとすれば調べられるんだよ。動かすのは貴様らでも、動くのは民だ。阿呆が。
「…貴様らは『悪即斬』のもとに…断つ。」
そう、貴様らのようなものを断つ為に、俺は『悪即斬』の信念を背負ったのだからな。

そして俺は、刀を構えなおし、王族どもと向かい合った。
……
刀が振られるたびに、腕を足を首を斬られる者が増えていく。
……
飛び散る血に円卓は、部屋は血に染まっていく。
…

「うっ。ぐぁぁ。」
老いた王族の胸に風穴を空けた後、牙突の構えを解く。
「さて、貴様で最後だな。国王」
俺は、国王と対峙した。

「くくく。なぜ、そこまでの強さを、信念を持っているというのに…、彼らの、我等の理想を理解しないのかね？」
「ふん。目的も分からんような奴らのために振るう剣など持っていない。」

そう言い捨てると国王は、
「はっはっはっは。では、教えてあげよう。彼らの、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の理想を。」
「まずは、この世界。魔法世界の成り立ちからだが……」

……
……
……
…

「そして、彼らを救うために作り上げられる、理不尽も不幸もない『楽園』に、世界は移り住むという事だ。素晴らしい事であろう。彼らは、我等は世界を救うのだ！」

国王は嬉々として語った。俺は話の途中で吸った煙草を吹かしながら、
「ほう。魔力が枯渇し、消えていく魔法世界と『いない』はずの魔法世界人を救うね。」
重要な要点を反芻した。

「そうだ。素晴らしかろう。ならば、今からでも遅くない。貴様も…」
「下らんな。」
俺の言葉に呆ける国王。

「正気で言っているのか貴様」
顔を憤怒の形相にした国王が問うて来る。

「正気も何も下らんといったのだ。何だその世界は。理不尽も不幸もない？そんな場所に住めるほど人間はきれいではない。」
更に続けて俺は言う。
「それにだ。今を生きている者が掴み取った幸せを無碍にする事が許せん。それは貴様らが行う事でも区別する事でもない。救いたいというならば、魔法世界の者全員に今の話を聞かせるがいい。わざわざ世界を滅ぼすような真似をせずともよかろう」
「世界を滅ぼさねば出来ぬ救いならば、しないほうが良い。神にでもなったつもりか？貴様ら…」

「黙っておれば、好き放題言ってくれるな賊がっ！」
憤慨して、こちらに攻撃を仕掛けてきた国王。
「それは、こちらの台詞だ。あまり好き放題してくれるな。この世界はお前らの世界ではない。たとえ作ってあったものだとしてもだ」
その攻撃をよけ、国王の心臓に狙いを定め、突きを放つ。

「がっ」
貫かれた反動で痙攣する国王。飛び散った血がすでに撒き散られていた血と混じる。
「本当に世界を、人を救うという事はそうではない。それに、人はそれほど弱くはない…。」
む。誰か駆けつけてきたか。当たり前か。門番が事切れているのだからな。
さて、完全なる世界（コズモエンテレケイア）。貴様らの目的は知った。だが、それは止めさせてもらうぞ。
窓に飛び乗り、虚空瞬動で空を駆ける。
「……王っ。…父上っ……っ…」
…暫くは、裏の諜報だけになりそうだな。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

ウェスペルタティア国王含め十数人の王族が殺された事は、オスティア王都だけでなく、帝国、Ｍ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）の連合を驚かせ、もちろん完全（コズモ）なる世界（エンテレケイア）にも衝撃の出来事であった。
―完全なる世界（コズモエンテレケイア）ｓｉｄｅ―
「くっ！」
振り上げた拳を思いっきり机に叩き落し、その結果机は粉々になった。
「なんてことだい。まさか、こんな事になるとはね。」

アーウェルンクスが、重々しく口を開く。
「早急に実行犯を探す必要があるな。」
デュナミスが提案する。
一見冷静そうな彼らだが、すでに回りはボロボロであった。デュナミスも握りこぶしで血がにじみ出ている。

「大幅な計画変更だよ。だが、戦争は、計画は終わらせない。みんなを集めるのは頼んだよ、デュナミス」
「心得た。忙しくなりそうだな。」
デュナミスは未だに八つ当たりをし続けている他の面々を呼びに行った。

「まさか、最近は出る事が無かったパイルドライバーが？これは僕たちも探しに出なければいけないかな」
そう言ってアーウェルンクスは、部屋を出て行った。

－side　end－

歯車は加速する。
ハジメは真実を知った。
しかし、その信念はその真実を否定し、ハジメは完全なる世界（コズモエンテレケイア）と対立する。
戦争は佳境を迎えようと激しさを増していく。

第１２話（後書き）

アリカのクーデターフラグを叩き折っちゃいました。一応続きとかは構想しているんですが、少し無理やりな展開かもしれませんね。

ではまた。

第１３話

青年は王女と出会う
彼女の瞳に青年は何を思う

第１３話
～出会い～

―主人公ｓｉｄｅ―
「で、これはどういうことだ。マクギル。」
少々目つきがきつくなるのを自覚しながら、マクギルの隣でこちらを睨んでくる小娘を無視して俺はマクギルに聞いた。

「ふぉっふぉっふぉ。もう会って話をしたようじゃのう。…印象は最悪のようじゃがのぅ…。」
話を変えようとするマクギルをもう人睨みし、
「誰が仕組んだ事やら。…今度はどんな頼みごとだ？マクギル。」

そういうと、マクギルは少し呆けた後にやりと笑って、
「この方を護衛してもらいたいのじゃ。」

…―遡る事約一時間前―
朝となり、人が行きかって騒がしなくなる時間に俺は静かな喫茶店の奥で一服していた。
この喫茶店は、俺がマクギルの秘書と契約の確認をした喫茶店で、それからというもの、俺が本国でマクギルと会うときは、いつも利用している喫茶店だ。だからなのか、いつも人は居ない。
いつもの通り、マクギルに渡された欠けた銀貨を渡し、奥の部屋に

行く。

つまり、俺はマクギルと待ち合わせをしているわけなのだが…、
「…遅い。」
すでに約束の時間から３０分は経過していた。普段はこんな事はない。襲撃でもされたか？それとも、とうとうボケが始まったか？いや、他にも……

そんな事を考えていると、
「すまぬ。道が分からなくてな。遅れてしもうた。」
現れたのはローブをかぶった小娘だった。
「…。小娘、貴様何者だ？」

「む。誰じゃ貴様は。気安く話しかけるな下衆が。」

ミシリと空間が悲鳴をあげた。

おっと。いかんな。思わず力んでしまったようだ。
「ほう。小娘如きが、偉そうな口をたたくな。程度が知れるぞ？」

「話しかけるなと言った筈なのじゃが。言葉が通じておらんかったのかのぅ。」
ほう。
「ふっ。なぜ貴様の様な小娘の言など聞かなくてはいけない？少々、いや、多大に自らを省みたほうが良いな。妄言もほどほどにしておけ、小娘。」
「っ。…ふっふ、私を知らんのか？無知もほどほどにしてほしいも

のじゃ。」
「ふぅ。名乗ってもいない、ローブをかぶっているような者を知っているとでも？その年で呆けたか？小娘。または、自意識過剰の阿呆かどちらかか。」
くく、我慢でもしているのか、手が震えているな。笑ってしまいそうになるな。
「…っ。ならば、私の顔を見て後悔しろっ。」
そう言って、ローブを取った小娘の顔は、…
俺が殺した国王の娘、ウェスペルタティア王国王女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアだった。

「いやぁ、すまんのぅ。少々ごたごたが起きておって…のぅ」。
マクギルがやっと来たわけだが、この場の空気を悟ったのか。
「ふぉっふぉっふぉ。わしが最後じゃったかぁ。」
俺と小娘…アリカ王女との間に座った。

―そして、冒頭に戻る―……

「な。誰がこんな無礼な男を護衛になどっ。」
小娘が、先ほどの事を根に持っているのか憤慨した様子でマクギルに詰め寄る。
「いや、じゃがしかし、そこに居る男、ハジメは世界の情勢を良く知っておるし、暗殺などにも鼻が利く。なによりも王女を任せられるほどに…強い。」
「む。しかし…。」
そして、こちらを睨んでくる小娘。

「ふぅ。」
俺は、いつものように煙草を吸い、紫煙を吹く。

「マクギル。護衛の必要性となぜ俺なのかの理由を教えろ。」
そうマクギルに聞く。まぁ、理由には見当がついているがな。
「ふむ。まず必要性じゃな。国王が死んだ事はもう知っておるの？」
「…あぁ。もちろんだ。」
「もちろん、次期王になるのはここに居るアリカ王女なのじゃが。ウェスペルタティア王国は今、ごたごたしておっての。なにせ、国王含め十数人の王族が暗殺されたのじゃからなぁ。無理もない。」
それを聞いた小娘はきゅっと拳を強く握った。

「…王国が沈静するまでの間暗殺や洗脳がされる恐れがあると、言うことか」
「まぁ、そういうことじゃのう。そして、それをお主に頼んだ理由はの…。」
そう言ってこちらを向くマクギル。

「お主最近、少々派手に動きすぎたようじゃ。勘付かれておる可能性がある。」
…やはりか。たしかに、この前の件はいろいろな奴らにとって、大事件だったようだからな。
「…ふむ。確かに、俺も少々仕事を控えようと思っていたところだ。受けてやってもいい。お前もそれでいいな？小娘。現状を把握できていないほど愚かではあるまい？」
「ぐっ。いちいち腹が立つ言い方をする…。嫌な奴め…。」
ぼそぼそと何か独り言をのたまっている小娘。どうでもいいが、聞こえているぞ？

「嫌な奴で結構だが…。受けるのか受けないのかどちらだ。」
「っ。か、構わんぞ。マクギル殿、この度の件感謝する」
聞かれていたことが大層驚いたらしいな。随分面白い顔をしている。

「いえ。当然のことをしたまでです。アリカ姫」

そうして、俺は小娘…アリカ王女の護衛となった。
ふぅ。さて、束の間の平穏な時間か。はたまた、新たな騒動の時間か。
まぁしかし、奴らの動きを見るためにも少々間が必要だったのも確かか。
ならば、しっかり励むとしよう。

「ほれ。さっさと行くぞ。ハジメ。」
そう言って、先に進んで物珍しいのか辺りを見回しながら先に進むアリカ王女。

…再訂正だ。やはり、まだまだ小娘だな。

第１３話（後書き）

今日は用事があるので、次話は夜になりそうです。ではまた。

第１４話

青年は王女に語る
王女は青年を知る

ー第１４話ー
〜護衛〜

M・M（メガロ・メセンブリア）首都の外れ。
休憩所となっているのであろう、その場所にまばらであるが人影がいくつか見えた。そこに、２つの人影があった。

ー主人公ｓｉｄｅー
俺は、抱えていた荷物を降ろし口を開いた。
「護衛されている身分というのに、随分とまぁ、買い物をしたな。」

「うっ。私は、あまり外に買い物をするということをしたことがなかったのじゃ。別に良いじゃろう。このくらい。」
そう言って、そっぽを向く小娘。
「別に構わんさ。俺にとっては休暇のようなものだ。」
そう言って腰を下ろし、煙草に火をつける。

「ほう。私を護衛する事が休暇と変わらんとな？」
「実際、今貴様を襲ったところで余計オスティアが混乱するだけだ。…まぁそのために襲う可能性もあるがな。」
紫煙を吐き出しながら続ける。
「それに、もし今、貴様を狙うというなら好都合。それは転じて、

この戦争が終わった後の弱みとなる。」
「私が死ぬ事になるとか考えんのかのぅ。」
そう口を引きつらせながら聞いてくる小娘。

「愚問だな。この俺が護衛である限り、やすやすと死なせん。仕事だからな。」
そう言いながら、立って感卦法を行う。
「ん？どうしたのじゃ」
それに疑問を感じたのか、小娘が問う。
瞬間、俺たちが居た場所に向かって放たれた魔法が向かってくる。
その方向に向かって構える。
牙突の構えから牙突零式を放ち、魔法を打ち抜く。そして、その直線状にあったものを全てなぎ払う。

「なに、五月蝿い虫が居ただけだ」
ふむ、辺りが少し騒がしくなってきたな。
「場所を移すか。」
「そ、そうじゃな」

……
……
…

見晴らしの良い丘に来た。ここまで来ると人は居ないものだな…。
そんな事を考えていると、
「ハジメは、いつもああなのか？」
「ん？なにがだ？」
小娘が変なことを聞いてきた。

「いや、ハジメはいつも攻撃されたりしたら、あのように反撃する

事に迷わんのかと思っての」
「おかしなことを聞く。今の俺は貴様の護衛だ。迷えば、死ぬのは俺でなくお前だ。」
そう言うと、なぜか小娘は少し笑みを浮かべ、
「ふふ。それはハジメの信念『悪即斬』からきておるのかの？」
「マクギルか…。あのおしゃべり爺が」

「私は、ハジメの口からその信念を聞きたいと思っての。なぜ父王が討たれたのか。」
そう言って、こちらを見る小娘。まさか、俺が仇と知っていたとは。だが、その目には理性の光がある。
「なぜ、それを知っておきながら、俺を護衛にする事を許した？」
父の仇ならば、近寄りたくもないだろう。それにいくら完全なる世界（コズモエンテレケイア）と繋がっていたとはいえ、表向きはなんら問題はなかったはず。

「分かっておるのじゃ。父王が何をしていたか。マクギルにも少し話を聞いた。…ハジメが討っておらんかったら、きっと近いうちに私が討っておったじゃろう。」
「そして、さっきハジメは私を守った。それで思ったのじゃ。別にハジメは王族が憎いわけではない、ハジメの信念が父王を討ったのじゃとな。」
丘の先へ足を進め、こちらへ振り返る小娘。
「だからハジメの口から聞きたいと思ったのじゃ。その信念を。」
紫煙を吐きながら煙草の火を消す。
「小娘。人にとって幸せとは何だと思う。金か？名誉か？家族か？…そんなものは人が積み上げてきたもので決まる。」
小娘は黙って聞いている。
「人の価値観とはその生きてきた環境で、人生で大きく変わる。家

族が居ない者が家族を求めて家族を作ったのならそれは幸せだろう。なにもない、食う物にすら困ったものならば、金を権力を手に入れたならばそれは幸せだろう。」
「だが、それが他のものが築き上げた幸せを踏み潰すものならば、俺にとってそれらは等しく悪だ。」

そこで小娘が口を開く。
「それでは、ハジメは弱者の味方という事か？」
「ふん。誰がそんな事を言った。弱いせいで踏み潰されるならば、それはそいつ自身のせいだ。強くなければ幸せなど手に入れることはできても守れん。」
「…不当に奪い、不当に得る。そんな奴らを斬るだけだ。」

「俺の信念は、悪を斬れても、幸せを、平和を守る事はできん。」
それが出来ていたらなば、この信念を貫いた男も違う時代を生きていたかも知れんな。

「それをするのは、お前らの仕事だろう？」
そう小娘に言うと、小娘は目をぱちくりとさせる。
「この戦争で腐った膿は俺のような奴らが吐き出してやろう。だが、戦争が終われば貴様らが舞台の主役だ。貴様に出来るか？平和を人々の幸せの基盤を築く事が。」

「ふふ。何を言うかと思えば。当たり前じゃ。人々が幸せを作れるように、守れるようにするのが私たち、私の任された事であり、信念じゃからな。民は私の宝じゃ。」
夕日を背にし、そう自信満々に答え、その瞳に強い光を見せる。
「それに、ハジメは私を守ってくれるのじゃろう。」
そう言って微笑むアリカ。

「…」
「どうしたのじゃ？ハジメ」
「いや、そろそろ帰るとしよう。」
帰り支度を始め、歩き出す。
「そうじゃな。」
そう言ってアリカは俺の横に並ぶ。

言えるわけなかろう。貴様に一瞬見惚れていたなど…。
言えるわけがない。

第１４話（後書き）

ハジメの信念を一部説明する意味も含めた話だったのですが、あれ？最後なぜこんな事に…。基本ヒロインとか考えていなかったんですけどね。どうしようかな。ハジメなら胸に秘めたまま終わりそうだけど。

難しいですね。ではまた。

第１５話

青年は束の間の平穏を得る
されど世界は動き続ける

第１５話
～平穏～

―主人公ｓｉｄｅ―
朝、新聞や情報端末から情報を仕入れていると、
「ほう。」
紅き翼がグレードブリッジ奪還にて活躍…か。
そろそろ戦況も動きそうだな。
「何を見ておるんじゃ？」
突然、アリカが顔を覗き込んで聞いてきた。

「グレートブリッジ奪還だ。知っているか分からんが、紅き翼（アラルブラ）の連中がその際に活躍したそうだ。」
そう返しながらアリカの頭をどかす。
「むぅ。…紅き翼（アラルブラ）か。聞いたことがあるの。千の呪文の男（サウザンド・マスター）じゃったか？ハジメはあったことがあるのか？」
どかされた事に若干不満でもあるのか、こちらを睨みながら聞いてきた。
「一応あの鳥頭や他の連中にも会ったことはある。が、このジャック・ラカンという男は知らんな。情報によると、自ら奴隷から傭兵に成り上がったそうだ。それなりの実力者だろう。」
ふと時計を見ると、マクギルに少し来て欲しいと頼まれた時間が迫りつつあった。

「さて、俺はマクギルのところに行くが、くれぐれも外出など軽はずみな事はするなよ？アリカ」

「む。私の護衛はハジメじゃろぅ。私を護衛せずしてどうするのじゃ。」

無愛想な顔だが、目が若干怒っている。はぁ。俺は父親の仇という事を忘れているのか？こいつは。

「俺の本来の仕事は諜報と暗殺だ。そもそもマクギルに頼まれた仕事だ。」

そう言って、マクギルのところへ向かう。

「早く帰ってくるのじゃぞ。」

……

…

マクギルの仕事用の書斎の前に着く。

「マクギル、入るぞ。」

そう言いながら中に入ると、マクギルの他に髭のメガネと少年（ガキ）がいた。

見た事ある顔だな。…あぁ。マクギルの情報源の一つか。

「お、ハジメ。よくきたの。」

「ほう。お前があの有名なパイルドライバーか。話はマクギル元老院議員に聞いているよ。」

「マクギル、貴様喋りすぎだ…。そして、誰だこいつらは。」

マクギルに釘を刺し、紹介を促す。

「分かっておるわ。」

そう言って、目で髭メガネどもに促すマクギル。

「あぁ。まぁ知っているとは思うが、元捜査官のガトウ・カグラ・

ヴァンデンバーグだ。」
髭メガネがそう自己紹介し、
「タ、タカミチ・T・高畑です！」
それに続いて少年も自己紹介した。

「俺は、ハジメ・サイトウだ。知ってのとおりパイルドライバー…政治家殺しをしていた。」
「していた…？」
目敏いな。ヴァンデンバーグ。
「今は、どこぞのお姫様を護衛していてな。それに、暫くは表立って動けんのだ。それが理由だ、ヴァンデンバーグ。」
「別にガトウで構わん。それより、姫というのは？」

「こ、これ。ハジメ。」
ん、これは教えてはいけないのか。てっきりここで情報の共有をすると思っていたんだが。

「知っているのですか？マクギル元老院議員。」
マクギルに問いただそうとしているガトウ。それに慌てるマクギル。
勢いよく開かれる扉。
…ん？
皆の視線が、一斉に部屋の入り口に向かう。
そこには、ローブをかぶった無愛想な顔のアリカが立っていた。
「遅いぞ、ハジメ。私が迎えに来てやったぞ。」
思わず、煙草を落としてしまった。
「…なぜ、貴様ここにいる。」
「今日は、中心街の方へ買い物に行きたくての。ハジメが居なかっ

たら行けんじゃろ？」
あまりの阿呆さに、思わず手でこめかみを揉んでしまう。
「…今日は大人しくしておけ、と言っておいたはずだが？」
「そんな毎日部屋に引っ込んでなどおれん。」
当然とばかりに言い放つアリカ。

「ま、まさか。オスティアの……。」
ローブで隠しているとはいえ、その顔に見覚えがあるのだろうガトウが呆然としている。
「なんということじゃ。」
マクギルも呆然としているな。

「ほれ、行くぞハジメ。護衛が居ればいいのじゃろ？」
そう言って、アリカは俺の腕を掴み、
「では、お主ら。ハジメを借りていくぞ。」
俺を連れ、書斎を出て行った。

呆然としている三名を残して。

……
…

「アリカ、貴様はもう少し自分の立場を認識しろ。ここはM・M（メガロ・メセンブリア）だ。スパイや過激な行動を取る奴など、どこに居てもおかしくはない。」
片手に荷物を持ちながら、俺はアリカに言い聞かせる。
「仕方なかろう。私はあまり世界というものを知らぬ。教えてはもらったが、見た事もないのじゃ。こうして、民たちがどういう生活をしているのかを、知りたいのじゃ。」
「それに、護衛であるそなたが、私を守ってくれるのじゃろう？」

そう言って笑顔でこちらに振り向くアリカ。

「…仕事だからな。」

「ふふ。なら問題なかろう？」

「はぁ。あいつら固まってたぞ？それに恐らく今日、互いの情報を話し合うつもりだったのだろう。まぁ結果は…貴様が乱入したせいで、マクギルは今日貴様の件について、ガトウに話す事も多そうだがな。」

そう言いながら、アリカを見る。

「むぅ。そこまで目くじらを立てんでも良かろう。」

むくれるアリカ。最初に比べ随分と表情を出すようになったな。最初は無愛想顔か睨み顔しかしなかったからな。

アリカが止まってしまったので、

「ほれ、行くぞ。まだ行きたい所があるのだろう？」

そう言って、手を差し出し先を促す。

「う、うむ。そうじゃな。では、…失礼して。」

そして、恐る恐る差し出した手を握るアリカ。

「ふふ。…こういうのもいいものじゃ。コホン。…では、行くとするかの。」

途端に笑顔となって、アリカが歩き出した。

よく分からんやつだ。そう思いながら、アリカと歩をあわせながら進む俺であった。

第１５話（後書き）

「アリカを救えっ。ついでに世界も救っちゃえ。大丈夫っ。ハジメならできる。」と友人に唆されたＧ－ｑａｚです。奴も俺もアリカ好き。

というわけで、アリカがヒロインになります。これから先、更に原作ブレイク、オリジナル展開が繰り広げられると思いますので、苦手な方は気をつけてください。

もちろん、楽しく読んでいただけるようＧ－ｑａｚも頑張りたいと思います。ではまた。

第１６話

青年はピースをそろえていく
世界は青年を補足する

第１６話
～合流～

―主人公ｓｉｄｅ―
「そうか…完全なる世界（コズモエンテレケイア）は、もうそこまで深く入り込んでいるのか。」
そう言ってガトウがうなだれる。
「あぁ。戦争の調整すら出来るほどにな…。オスティアを守った後、紅き翼（アラルブラ）が辺境に飛ばされたのも、おそらくは連中の息がかかった奴らが仕組んだ事だろう。あいつらは良くも悪くも戦況をひっくり返す力を持っているからな。」
短くなった煙草を灰皿に押し付け、新たな煙草に火をつける。

今日はガトウと、先日アリカに邪魔されて、できなかった情報の共有をする事になった。アリカ？今はもう夜だからな。寝ているだろうさ。
マクギルはアリカの事をガトウに話すことが主だったらしく、いない。最近、連合の戦績が良くなっているため忙しいようだ。
「しかし、良くこれだけの情報を個人で…。いくら元老院議員の助力が会ったとしても、凄まじい諜報力だな。」
机の上に散らばる資料。端末の情報。それらを見渡しながらガトウが呟く。

「なに、その殆どが非合法で手に入れた情報だ。今考えると、なぜ完全なる世界（コズモエンテレケイア）の連中に見つからなかったのかが分からん。」
そう疑問を呈し、紫煙を吐く。
「恐らく、殺したのが完全なる世界（コズモエンテレケイア）に関する者だけでなかったことと、パイルドライバーが顔すら知られていなかった事が大きいだろうな。」
資料を見通しながら、ガトウがそう返す。
お互いの調べ上げた資料を見ながら、今のように疑問などをやり取りしながら情報の共有を済ましていった。
「そして、これは本当なのか？魔法世界が消える…というのは。」
ガトウが、俺が未確認とした情報について聞いてくる。
「未確認と書いているのが見えんか？それに、そこに書いてある情報はおそらく、直接完全なる世界（コズモエンテレケイア）の連中に聞かねば分からん事だろう。下手すると、全てが嘘かも知れん。」
どこの世界にあなたの世界は魔法で作られているんですよ、と聞いて信じる阿呆が居る。
「だが、これが真実だとすると、奴らが戦争を裏で操っていることの辻褄が合うな。」
「そういうことだ。そして、今は奴らのアジトを探っている最中というわけだ。」
「が、有力なものはないな。殆どが探った後か、信用の乏しい情報だ。」
そう言って、資料を閉じる。
「だが、敵は知れた。これは大きい。」

「せいぜい、頑張ってくれ。こちらも護衛がなければ世界を飛べるんだが…。」

「おいおい。姫様を何だと思っているんだよ。」
ガトウが苦笑を浮かべる。
「次世代の礎を築くべき人間だな。信念を持っているし、芯も通っている。奴らの思惑のために、死なれたりするのは困るな。」
アリカの感想を述べたら、ガトウが呆けた顔をしている。

「どうした？」
「いや、普段から想像できんほど、姫様を買っているんだな」
「ふん。正当に評価も出来んようでは、諜報はできん。」
「それもそうだな。」

そうして、夜は更けていった。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―紅き翼ｓｉｄｅ―
「しかし、ガトウの奴、会わせたい奴らがいるって言ってたけど、どんな奴らだろうなぁ」
ナギが期待を強くした声で疑問を投げかける。
彼らは今日、ガトウに呼ばれ本国首都まで来ていた。
「さて、協力者とは言ってましたが…」
アルビレオもさすがにその詳細までは分からないようだった。
「よう、よくきたな。早速会わせたいと思うから、こっちに来い。」

ガトウが到着したナギたちを案内する。
「なっ。マクギル元老院議員っ」
マクギルの姿を見た詠春が驚き声を上げる。
「わしちゃう。主賓はあちらの方だ。…ウェスペルタティア王国…アリカ王女じゃ。」
マクギルの紹介と共に、こちらの部屋に上がってくるローブを纏った女性。そしてその少し後ろに控える、口煙草をしながらこちらを見ている男がいた。

その男の姿を見てナギが、
「あーっ。お前、オスティアのときにいたえーっと…、誰だっけ？」
見覚えがあるのか、声を上げ男を指差したが名前が出てこない。
「ふふ。そういえば彼とは名前も交わしませんでしたね。」
アルビレオが名前が出てこない理由を述べた。
「そうだったっけ？」
「そういえば、名前を交わしていなかったな。」
「宴じゃったしのぅ」
ナギも詠春もゼクトも名前を交わしていなかったのを思い出したようだ。
「おいおい、俺はこいつ知らねぇんだが。そんなに面白い奴なのか？」
唯一会っていないラカンも加わる。

「阿呆か、お前ら。主賓は俺じゃなくこいつだ。」
そう男が口を開き、場の修正をする。
「そ、そうだぞ。お前ら。王女を前に失礼だろうが。」
ガトウも、まさかこうなるとは思わなかったらしく、少々焦りながら続く。

「いや、別にもう良い。すこし、外に出る。」
そう言い残し、去っていく王女。

「ん、終わりか？んじゃ、お前名前なんていうんだ？」
そう笑顔で聞いてくるナギに、
「「はぁ」」
男とガトウのため息が重なった。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－完全なる世界（コズモエンテレケイア）ｓｉｄｅ－
「こいつがパイルドライバー…なのか。」
資料を読んだデュナミスがアーウェルンクスに問う。
「まだ、恐らく…という段階だね。なにせ、用意周到で痕跡も死体以外残さない上、顔も知られていないからね。…だけど、８割方彼で決まりだろうね。このような状況を作り出せる者が、他にいると考えるのは少し厳しい。」
そうアーウェルンクスが返す。

「…ふむ。…異界の者か…。」
そこに突然、何者かが話に割って入った。
「「っ！」」
「…造物主（ライフメーカー）…。まだ出番は遠いと思いますが？」
デュナミスが突然現れた黒いローブを纏った者に聞く。

「…興味が湧いた…。」
造物主（ライフメーカー）と呼ばれた者が資料を見る。

そこに書かれていたものは、オスティアで活躍した傭兵ハジメ・サイトウのものであった。

第１６話（後書き）

さて、とうとう造物主も登場しました。もう少しで戦争編も終われるかな。

「お前、遅筆じゃなくね？」そういわれたＧ－ｑａｚでした。どうなのでしょうね？ではまた。

第17話

青年は先を見据える
世界は青年に襲い掛かる

第17話
～襲撃～

―主人公side―
「ふむ。こんなものか。」
構えた刀を解く。
「ぜぇっ。ぜぇっ。」
「はぁっ。はぁっ。嘘だろ？俺たち2人がかりでこれかよ。」
地面に倒れこんでいるナギとラカンを見下ろす。

「これでも修羅場をいくつも潜り抜けた身でな。諜報活動というのを甘く見るなよ？」
この2人が、「一戦やろうぜ。」と余りにしつこいため、「ならば2人がかりで来い。格の違いというのを見せてやろう。」と相成り、ここでは大規模な魔法や気を使えないため肉弾戦にしたわけだが、

「それにしても貴様ら、本当の阿呆か？そんな直線的な攻撃ばかりならば誰でもよけれるぞ。戦い方というのを知らんのか？」
そう、こいつら連携が出来ていない上、殆どが真正面からや大して作戦も立てずに突っ込んでくるという、いわば自らの身体能力や魔法でしか勝負していない。

たとえ、頭を使った攻撃をしようとしても、分かりやすいフェイントだったりする。

「いや、あの速度で対応できるのはそう居ないと思うのだが…。」
少し離れた場所で詠瞬がそういうと、ガトウも頷いていた。
「これから貴様らは、完全なる世界（コズモエンテレケイア）と戦う事になる。これぐらい出来る連中だと思っておけ。おそらく、トップに近しい立場であろう、あの人形のような奴は…鳥頭、お前と同じほどに強いぞ？」
「へっ。おもしれぇ。世の中にはまだ、こんな強いのが居たとはな。」
そう笑みを浮かべながら立ち上がる鳥頭。
「後、俺は鳥頭じゃねぇっ！ナギ・スプリングフィールドって名前があるんだよっ。」
そして俺に向かってくる鳥頭。

「そういうことは、せいぜい俺を倒したときに言うんだな。」
「ワッハッハッハ。…俺も忘れんじゃねぇぞっ。ハジメっ」
さて、この阿呆どもの相手は、もう少し続きそうだな。

……
…

「おぉらぁぁぁっ！」
瞬動でこちらに向かってくる鳥頭。
それにあわせながら、後ろを狙っているラカンの顎に、鳥頭をよけながら掌底を喰らわす。
「ぐぉっ」
「だから、丸分かりだ。阿呆共。」
俺の横を通り過ぎる鳥頭のローブを掴み、地面に叩き潰す。
「ぐぇっ」
「もうこのぐらいで良かろう。魔法も気も放てないならばそこらに

居るものとそう変わらんのは理解した。」

「いやいや、んな阿呆な。」

「ふふ。格闘術なら、まさに格が違うようですねぇ。」

詠春とアルビレオが苦笑しながら俺の言葉に反応する。

「くそぉ。次戦(や)る時は、もっと広い場所でやろうぜ。俺の大呪文で今度こそ倒してやる。」

「おうっ。俺のラカンスペシャルでな。」

随分と立ち直りが早い連中だ。

「さて、俺は護衛に戻る。マクギルが来たら連絡してくれ、ガトウ」

「了解した。大変だな、お前も。」

「ふっ。仕事だからな。」

……

…

アリカがいたバルコニーに辿り着くと、

「なんじゃ。お主がいれば、別に紅き翼(アラルブラ)という奴らに、力を貸してもらわなくとも良かったのではないか？」

「なんだ。さっきのを見ていたのか？」

バルコニーの手すりの部分から下を見ると、なるほど。さっき鳥頭たちの相手をしていた場所が見えるな。

「なに。奴らの本領は特大の魔法や気だ。こんな狭いところでは真価は測れん。…それに、数は力だ。俺一人より、奴らがいたほうが良い。アリカを守れるものも増える。」

「なんじゃ。ハジメが護衛ではないのか？」

「これからまた忙しくなる。俺は諜報の役目があるからな、鳥頭共も護衛位できよう。」
そう返しアリカのほうを見ると、あからさまに不機嫌だった。
「どうかしたか？」
「別にどうもしとらんっ。」
…よく分からんやつだ。

「それと、戦争の調停に関してだが…、マクギルが帝国の第三皇女との調停の場を用意してくれた。マクギルが着き次第向かうぞ。」
その言葉に、アリカに笑みが戻る。
「そうか。この戦争を終わらせることができるのじゃな？」

「さぁな。まだ、連中が動いてきていない上に、まだ中枢には連中の息がかかった奴らがいる。…だが、無駄ではなかろう。」
その言葉に満足したのか、アリカは、
「うむ。まずは話し合う事が重要なのじゃ。帝国にもそう考えてくれているものが居るだけで、私は嬉しく思うぞ。」
と微笑を浮かべながら話した。

＜ハジメ。マクギル元老院議員が到着したようだ。姫様を連れてこちらに来てくれ。＞
ガトウから念話が入る。
＜わかった。そちらに向かう。＞

「アリカ。マクギルが来たようだ。行くぞ。」
「うむ。」
進むアリカの後ろを俺はついていった。

……
…

「マクギル、首尾はどうだ？」
そうマクギルに問う。
「大丈夫じゃ。この船で向かう先に帝国の第三皇女が居る。」
ふむ。小さい船だな…当たり前か。調停の話し合いをするために行くのだからな。

「…ふむ…。…揃いも揃ってどこに行くのか…。」
瞬間、戦闘体制をとる俺と紅き翼の面々。
そこに佇んでいたのは、黒いローブを身に纏った性別も判定できない輩だった。
「おいおい。…あいつはなんだ？やばいなんてもんじゃねぇぞ。」
その異質さを肌で感じるのか、ラカンが冷や汗をかきながら喋る。
「貴様が、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の長。…黒幕というわけか。」
感卦法を行いながら、ローブに問う。
「…否定はせん…。」

「鳥頭っ」
鳥頭に呼びかけ、後ろに控えさせていたアリカを投げる。
「なっ？」
投げられたアリカをキャッチする鳥頭。
「アリカを頼んだぞ、鳥頭。」

「なっ。ふざけんなっ！あいつがどんなやばい奴かハジメにも分かるだろっ？」
ナギがそう叫ぶが、睨み返し黙らせる。

「…くっ。」
「…なに、死にはせん。少々聞きたいことがあってな。貴様らでは足手まといなだけだ。」
だから、さっさとアリカをつれて逃げろ。鳥頭。

「行くぞ。ナギ。アリカ姫もこちらへ。」
「ハジメっ。お主は私の護衛であろう。」
アリカがナギに抱えられた格好でこちらに問いかける。
「さっきも言っただろう。そいつらでも護衛ぐらいなら出来る。…鳥頭。」

顔をしかめる鳥頭。
「お前とはまだ、全力で決着つけてねぇんだからな。死ぬんじゃねぇぞっ。」
そう言って、アリカを連れて船に乗り込む面々。

ふん。まだ言っているのか。あいつは…。
船を見送った俺は、ローブに向き直り、
「まさか、待っていてくれるとはな。随分やさしいじゃないか造物主(ライフメーカー)。」
ローブが少しゆれる。
「くく、ふはははは。今更私の正体を知っていたところで、驚きはせん。我が興味を抱いたのは貴様なのだからな…ハジメ。…異界の者よ…。」
そう言ってこちらを見据えてくる造物主。まさか、本当に敵の黒幕がこちらに来るとはな…。

「造物主(ライフメーカー)…。貴様にはいろいろと聞きたいことがあるのだが、その前に一つ確認だ。…さっさとこの戦いから引く気はないか？」
刀を構えながら、俺は造物主に問う。
「……もはや我が悲願は、すぐ先にある。それを引く気は、毛頭無い…。」

俺と対峙する造物主。なるほど、強い。死ぬかも…知れんな。
だが、我が信念…曲げるわけにはいかん。
「そうか。ならば、造物主(ライフメーカー)…貴様を、その目的を『悪・即・斬』のもとに…断つっ。」
「やってみるがいい。人間…。」

そして、俺と造物主の戦いが始まった。

第17話（後書き）

あともう少しで戦争編が終わるはずなので、今日中に終わらせたいと思います。
次回はハジメ対造物主。戦闘シーンは苦手ですが、何とか読めるようにはしたいと思います。ではまた。

第18話

青年は世界と矛を交える
されど青年は笑う

第18話
〜敗北〜

M(メガロ)・M(メセンブリア)の首都のはずれで、戦いは起きていた。
「破ぁぁぁっ」
ハジメの突きが、一筋の閃光となって空を貫く。
「くははははっ…。その程度か…異界の者よ。」
造物主の背から、魔方陣が空に描かれる。世界の理は曲げられ、次元がゆがむ。

「くっ。」
その刹那、数十、数百もの闇の線がハジメを襲う。
「なんとまぁっ。規格外なっ…攻撃だっ…。」
虚空瞬動、縮地を用いてそれ一つが致命傷だと思えるような攻撃を避け続ける。

刀を構えなおし、一気に造物主の元へ駆けるハジメ。障壁を紡ぐ造物主。
造物主の障壁とハジメの刀が、凄まじい音を立てながら競り合う。
「なかなか硬い楯だな。」
「そちらも…良く折れぬ。」
ハジメは笑みを浮かべる。造物主はローブで顔は窺い知れないが、おそらく笑みを浮かべているであろう事は雰囲気でわかった。

「破っ！」
ハジメが薙ぎ払い、袈裟懸け、突きと、それら一つ一つが必殺の一撃を造物主へ放つ。
「くっ…。」
しかし、造物主は魔力で覆った肉体で、魔法で、それらを全て紙一重で避け、いなすが、一撃を喰らう。

「っ…」
刀は造物主を貫くが、
「…墜ちろっ…。」
造物主が魔法を放つ。
咄嗟にいつものように、魔法を斬るハジメ。
「なっ。」
しかし、刀が折れ、全てを斬り損ねてしまい、残りの魔法がハジメに直撃する。
「がっ。」

魔法で打ち落とされたハジメの場所にクレーターが出来上がり、粉塵が舞い上がる。
「…」
静かに地面に下りてくる造物主。

曇天の空から雨が降り始めた。

ー紅き翼ｓｉｄｅー
ハジメと別れ数時間たち、テオドラ皇女との調停の会談の場所に着いた一同。
しかし、

「おーい、姫さん。そろそろ立ち直ってくれよぉ。」
そうナギがアリカに声をかける。
「なんじゃ？何が起きたんじゃ？なぜアリカ姫はあんなに落ち込んでおるのじゃ？」
先ほどまでの事情を知らないテオドラ第三皇女が、紅き翼の面々に問いかける。
「はは。なんと言えば良いのやら…。」
苦笑するガトウ。
「まさか、こんな事になるとはの。」
思わぬ事態に困惑するマクギル元老院議員。
「はっはっはっは。ハジメが死ぬわけねぇだろ、姫さん。俺とナギ相手に勝っちまう男だぞ。」
若干汗をかきながら、ナギと共にアリカに声をかけるラカン。

ハジメと別れてから、アリカがどんどん塞ぎこんでしまったのであった。

「ふふ。ちょっと、想定外の事態が起こりましてね。」
「一人メンバーが欠けてしまってな。」
テオドラの疑問に返答するアルビレオと詠春。

「だーかーらよっ。あいつが死ぬわけねぇだろっ！…俺とも約束したんだ、決着つけるってな！姫さんだって、あいつとなんか約束とかあんじゃねぇのか？姫さんは、ハジメを信じらんねぇのかよっ！」
いい加減頭にきたのか、声を荒げるナギ。
「っ。」
塞ぎこんでいたアリカが顔を上げる。
「あるみてぇだな。」
「…あぁ、ある…ふふ。すっかり忘れておったわ。こんな様ではハ

ジメに怒られるの。」
そう言って笑みを浮かべるアリカ。

「すまぬの、みんな。テオドラ第三皇女。調停のための話し合いをしよう。」

そこにタカミチが扉を開け放ち入ってきた。
「どうした？タカミチ。そんな勢い良く入ってきて。」
その姿に疑問の声をかけるガトウ。
「はぁっ、はぁっ。こ、これを見てください！みなさんっ！」

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－主人公ｓｉｄｅ－
雨が降るのを体で感じながら、考える。
まいったなぁ。この世界で目覚めてからずっと愛用していたんだがなぁ。折れてしまった…か。
ふむ。左脇腹を抉られたのと、背中を強打しただけか。ならば、まだ戦えるな。…俺は折れていない。
考え終わると、俺は立ち上がった。

「…っ…。まだ生きていたか…。…ハジメ…。」
俺の姿を見て驚く造物主。むしろ、俺が驚くのだがな。
くく。信じられんな。殆ど無傷…か。割に合わんな。まるで、ここにいないよう…っ

「くくくっ。ならば、とんだ道化か…。」

折れた刀の切っ先を見つけ、それを取り握る。

さて、この方法は考えてはいたが試した事が無い…。まぁどうとでもなるか。

「…？なにをしている。」

造物主がこちらに問いかける。

「いやなに、…考えていた。貴様…実体を持っていないな？いや、正確にはその肉体…貴様のものではあるまい。」

そう言った瞬間、造物主の雰囲気が変わった。

「…なぜ？」

「今思い返すと、動きが余りに不自然だった。それに…貴様２，３俺の技を喰らっていただろう？なのに、だ。なぜ、貴様平然としている。」

言葉を発しながらも、俺は感卦法を行い、更に調整する。

「…やはり、貴様は異分子であったか。…この肉体は貴様と戦った後、滅ぶのみ。」

「だが、貴様である事に変わりなかろう。…それでも操っているのは貴様だということ…。」

「…何を言って？…っ！貴様何をっ！？」

俺のしていたことに驚く造物主。

俺がしていたこと。それは感卦法のを感卦法の力で行い、それを延々繰り返すというもの。名づけて感卦螺旋法。欠点が大きいがな。調整が難しすぎて、戦いの最中に使えん上、おそらく放つ技の威力も桁違いになるだろうから迂闊に試せないという、大きな欠点だ。

俺が制御できる限界まで、力を高め続ける。

「…愚かな。身を滅ぼすだけだ…。」

「なに。負けっぱなしは気に喰わんのでな。これなら貴様を断てる。それにな…」

そう言って、折れた切っ先を造物主に向けながら、牙突を構える。
「言ったであろう？貴様を…そのふざけた目的を『悪・即・斬』のもとに断つとなっ。」
今。限界を迎えた力を全て造物主に向けて放つ。
「…くっ。リライトっ」
世界を貫く光の螺旋と、世界を書き換える掟がぶつかる。
その瞬間世界から音が消えた。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

－紅き翼ｓｉｄｅ－
「こ、これを見てくださいっ」
そう言って持ってきた新聞を開く。そこには、
「「なっ！」」
全員の驚きの声が重なった。

新聞の一面にはこう書かれていた。
Ｍ・Ｍ（メガロ・メセンブリア）マクギル元老院議員の邸宅から半径５Ｋｍの範囲で街が消え去っており、街の機能が停止したこと。昨夜起こったことについて、様々な推測が書かれており、その推測には、紅き翼（アラルブラ）がこれを起こしたのではないかという事と、その証拠、証言らしきものが書かれていた。

－ｓｉｄｅ　ｅｎｄ－

―完全なる世界（コズモエンテレケイア）ｓｉｄｅ―
「…くっ。…まさかこちらまでダメージが来るとは…」
「造物主（ライフメーカー）っ。…どうなりましたか？」
造物主に問いかけるデュナミス。

「…ふむ…っ。」
左胸に刺さった刀のような魔力の残滓に気づく造物主。
「…この身に届くほどに、…大した信念ではあった。…が、」
その残滓を抜き、
「…最早、…我等の前には居ない。」
砕いた。

「分かりました。では、計画を進めたいと思います。」
そう言ってデュナミスは立ち去り、
「紅き翼（アラルブラ）の連中とマクギル元老院議員。アリカ姫に対しては、すでに策は取ってある。後は我等が成すべき事を成すまで。行くぞ。」
待機していた他の面々に、声をかける。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

戦争は終わらない…

第１８話（後書き）

総合評価が１０００ｐｔを超えてテンションが上がったので、そのテンションのままに書き上げました。やはり、戦闘は難しい。そして、眠気が襲ってきたので寝ます。続きはたぶん昼ごろ書きます。今日中に戦争編を終わらせるつもりです。ではまた。

第１９話

そこに青年は居らず
されど反撃の牙は研がれる

第１９話
～反撃～

―紅き翼ｓｉｄｅ―
タカミチが持ってきた新聞に皆の視線が集まり、静寂がその場を支配する。

「おいおい、これってつまりはよ…」
ラカンが若干戸惑いながら沈黙を破る。
「おそらく、いえ間違いなく昨日あれから起きたのでしょう。」
アルビレオが真面目な顔をして結論を口にする。

「まさか、ハジメの奴…」
ナギがそう口を開こうとしたとき、
「それよりも、こちらのほうが問題じゃ。この件、お主ら紅き翼（アラルブラ）が原因となっている。…おそらく、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の奴らが情報を操作したのじゃろう。」
アリカが、街が崩壊した事ではなく、紅き翼がその主犯として書かれていることについて口を開いた。
「そ、それよりもって、おい。ハジメが心配じゃないのかよ？」
ナギがアリカに問う。
「お主こそ、現状を理解せよ。これは恐らく…奴らの脚本（シナリオ）通りじゃろう。ガトウ。」
それに対し、アリカは執りあいもしない。

「この手際のよさ。おそらくは昨日の時点で狙っていたのでしょう。アリカ姫」
「そうか。ではお主、ハジメから完全なる世界（コズモエンテレケイア）に関する情報はもらっておるな。」
「はい、情報の共有はすでに済ませています。資料もこちらに。」
そう言って、端末といくつかの紙の束を見せるガトウ。
「うむ。ならば、完全なる世界（コズモエンテレケイア）に関与する者を除き、我等の味方を、我等の話を聞いてくれるような者達を探せ。その者らを中心に、奴らと戦うための準備をせねばならん。」
「分かりました。…タカミチ、行くぞ。」
「はいっ」
早速行動に取り掛かるガトウとタカミチ。

「さて、紅き翼（アラルブラ）。お主らはガトウに協力できるものは協力を頼む。出来ぬものは我らの護衛、敵の殲滅じゃ。」
そして、アリカは皆を見渡し、
「敵は世界じゃ。これを見れば分かるが最早…我らの味方は居らぬ。…ならば、我らが世界を救おう。良いな？」
皆に問う。
「あったりまえだっ！」
「はっはっはっは。楽しくなってきたなぁおい。」
「ふふふ。相変わらずですねぇ」
「やれやれじゃの。」
「こいつらは、敵の殲滅だな」
紅き翼の面々がそれぞれに応える。

「うむ。では、テオドラ第三皇女。マクギル。我らもこれからどうするか話し合おう。」
「そうじゃな。まさか、これほどまでに、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の力が世界

の中枢に入り込んでいたとは、驚きじゃ。」
テオドラは、驚きの面で言う。
「戦争を終わらせる事は、完全なる世界（コズモエンテレケイア）を倒す事には始まらないのう。…わしはM・M（メガロ・メセンブリア）のほうで、協力者が探してみるとしよう。」
マクギルがそう続け、ガトウのほうへ向かう。より厳密に探すためである。
「うむ。それなら、わしは帝国じゃな。」
テオドラもガトウのほうへ向かう。

「…」
一人になったアリカは、外の風景を見ながら、唇をかみ締め、拳を握り締めていた。
「…ハジメ…。」

ーｓｉｄｅ　ｅｎｄー

ーナギｓｉｄｅー
はぁ、随分気丈な姫さんなことだよ。
「ん～。姫さんを見てな～に考えてんだよ、ナギぃ。ありゃ無理だぞ。ハジメにぞっこんだ。」
突然ラカンが後ろから声をかけてくる。
「うっせぇっ。そういうんじゃねぇよ…。というか、ハジメの野郎。生きてやがるんならさっさと来いってんだ。」
あの野郎が死ぬとは思えねぇが、あんな写真を見ちまうとな…。
「ワッハッハッハ。さっきお前なんて姫さんに言ったんだよ。ハジメを信じられないのかって言ったんだぜ？」
「っ。あぁ、そういうことか。不器用な姫さんだなぁ。」
姫さんに、あんなに心配かけさせやがって。
だからよ。
さっさと帰って来いよ、ハジメ。

俺との決着は、まだ着いてねぇんだぜ？

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

それから、世界は大きく動く。
アリカ率いる紅き翼のメンバーは、ガトウやアルビレオがハジメの情報を元に完全なる世界（コズモエンテレケイア）に関係する大きな組織などを暴いていった。
そして、それらを確認したラカンやナギの実働メンバーが敵だと分かった組織を次々と潰していった。
アリカやテオドラたちは、その裏で必死に説得をしながら徐々にだが味方を増やしていった。

…そして、とうとう彼らは辿り着く。
最期の決戦の地…墓守り人の宮殿へと

……
……
…

―オスティアの荒野…

「造物主（ライフメーカー）…、言ったはずだ。貴様の目的は断つと。」

独りの男が呟いた言葉は、砂塵と風にかき消される。

戦争は佳境を迎える…。

第１９．５話（前書き）

やはり、一気に飛ばしすぎたように感じたので最終決戦までのちょっとしたお話を

第１９．５話

王女は青年を想う
少年の想いはただあふれる

第１９．５話
～想い～

…最終決戦よりしばし時は遡る
ハジメの消息が分からなくなってから数ヶ月のときが過ぎたとき…

―ナギｓｉｄｅ―
「よぉ。ただいま戻ってきたぜぇ。」
ラカンと共に基地に戻ってきた。
あの日から随分と時間が過ぎた。俺達は今、味方集めと敵の殲滅を行っている。

「ああ、お疲れさん。…しかし、今回も黒か…。ハジメの情報収集の精度の高さとその量には驚かされてばかりだな。」
ガトウが感嘆の声を上げている。

ハジメが残していた敵さんの資料と情報。それは俺達の大きな行動指針となっていた。ちいせぇ組織からバカでけぇ組織まで、どこが怪しいのか記してあった。それをガトウやマクギル、アルとかがより詳しく調べるとあっさりと敵さんがどうか分かっちまう。…やっぱ、あいつとんでもねぇやつだな。

「ったく。すげぇのは、わかるけどよ。あいつは、今どこにいるのやら。」

そう言いながら、姫さんを思い出す。

ハジメがいなくなって、1ヶ月ぐらいは気丈に振舞っていたけどよ。まぁそれでも十分強いと思うけどな。やっぱり、不安なのか寂しいのか知らねぇが、この前の夜。月を見て涙流してやがった。

ハジメ…。帰ってこねぇならよ。俺が奪っちまうぞ？俺はきっと姫さんが好きだぜ？お前はどうなんだよ…ハジメ…。

しばらく、休んで物思いに耽っていると扉が開いた。
そこには今考えていた姫さんが立っていた。
「どうかしましたか？アリカ姫」
ガトウが突っ立っている姫さんに聞く。
「いや…の。」
辺りを見回す姫さん。そして、俺と目が合った。
「ふむ。鳥頭、暇そうじゃの。護衛を頼むぞ。」
そう言って、部屋を出る。
「は？」
疑問の声を上げても、誰も応えない。
「おいおい、ちょっ。ちょっと待ってくれよっ。姫さん。」
俺は慌てて姫さんの後を追う。

「姫さん。どこに行くんだよ？」
追いついて俺は姫さんに聞く。
「どこと言われてもの、買い物に行くのじゃが。そのためには護衛が必要じゃろ？」
あっけらかんと言う姫さん。

「はぁ。俺、敵さん倒して疲れているんだけど…。」
「そんなものでは、完全なる世界（コズモエンテレケイア）には勝てんぞ？早く着いてまいれ。」
さっさと先を行く姫さん。
ハジメ…。こんなのを護衛していたのかぁ。

俺達はローブをまとって、街に出る。姫さんは街の大きな店や小さな雑貨屋など、いろいろな場所を知っていた。
思わず俺は、
「姫さんいろんな場所知ってんなぁ。」
などと呟いていた。
それを姫さんは、
「ふふ。数ヶ月前には、護衛に託（かこつ）けて、ハジメを連れていろいろな場所へ行ったからのぅ。…やはり、いいのぅ。変わるものもあれば、変わらんものもある…の。」
そう言って目を細める姫さん。

まるで、姫さんの隣にハジメがいるように…見えちまった。

姫さんは、買い物を終えたら夕日の見える丘に来た。
「すまんのぅ、ナギ。今日はつき合わせてしまっての。」
こちらを見る姫さん。
「別にかまわねぇよ。」

「ふふ。…ハジメはどうしておるのかの。あの馬鹿者が。」
そう言って夕日を見ながら微笑む姫さん。

なんか、込上げて来ちまった。
「なぁ、姫さん。俺じゃ、…俺じゃハジメの変わりになれねぇのかっ？」
ハジメの消息が分からないときいても、気丈に振舞う姫さん。
世界を敵と定め、それでも世界を救おうと頑張ってる姫さん。
ハジメが心配の癖に、笑う姫さん。
もう、見てられなかった。
「俺は、…俺はっ」
「そこまでじゃ。鳥頭。」
そう言って、こちらに手の平を出す姫さん。
「ありがとう、ナギ。」
「じゃが、私はやはりハジメが好きなのじゃ。今日、お主と街を回って思ったわ。…最初あったときはあれほど憎かったというのにのぅ。ハジメと会うたび、話すたびに惹かれておる私がおった。」
きれいな笑顔を見せる姫さん。
「それにの、ナギ。人は、誰かの代わりになどなれん。だからこそ、人は皆それを必死に守るのじゃよ。」

「そっか。そうだよな。へへ。なんか、悔しいな。そこまで言われるとよ。」
振られちまったか。
「ふふふ。…ハジメに会わんでいたら、お主に惚れていたかも知れぬな。」
姫さんが何か言っている。
「ん？何か言ったか？姫さん。」

「いや、では帰るとしようかの。ナギ。今日はありがとうの。」
「なぁに。いいってことよ。」
そう言って笑う俺。

ハジメ。姫さん待ってんぞ。さっさと帰って来いよ。

……

…

そして、全てが集結し、終結する戦いへ時は進む。

第１９．５話（後書き）

謀略に関しては冗長してしまうと思いましたが、こちらはそういうわけにはいかないので書きました。
ハジメがいなかったらくっついた二人が主役でした。

第２０話

世界を救うべく翼は羽ばたいた
そして青年は地より蘇る

第２０話
～最終局面～

―ナギｓｉｄｅ―
「不気味なくらい静かだな。奴ら。」
墓守人の宮殿が見える場所で、俺らは最後の戦いのときを待っていた。
「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」
隣にいるラカンが、ふざけたように言う。

ハジメ…とうとうここまで来ちまったぞ。お前はなにやってんだ？

「ナギ殿っ。帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」
おっ。そろそろか。
「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ、俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「ハイッ。…それで、あの、ナギ殿。」
ん？まだ何かあったか？
「サッ、サインをお願いできないでしょうか？」
そう言って、報告に来た女の子が色紙を差し出してきた。
「おあ？いいぜ、そのくらい。」
俺達も有名になったからなぁ。色紙にサインを書き、女の子に渡す。

「そ、尊敬していました。」
隣でラカンが大笑いしてやがる。
さて、さっさと姫子ちゃんを助けるとしようじゃねぇか。

―side end―

「連合の正規軍は派遣できる説得したのじゃが、…この様子じゃ間に合わんのぅ。」
空中に浮き出た画像の向こう側にいる、マクギルが報告する。
「こちらもだ。帝国も間に合いそうにない。」
もう一つの画像でガトウの報告が入る。
「決戦を遅らせる事はできそうか？」
「無理ですね。私達でやるしか無いでしょう。」
ガトウの問いにアルビレオが答える。
「タイムリミット…だな。」
詠春も続けて応える。

「ええ。彼らはもう始めています。『世界を無に帰す儀式』を…。世界の鍵『黄昏の姫巫女』は今彼等の手にあるのです。…ハジメはこれを危惧していたのでしょう」
アルビレオが真剣な面持ちで喋る。
「はっ。なぁに。さっさと姫子ちゃんを助けりゃ問題は無いだろう？」
ナギは笑みを浮かべそう言い、
「よぅし、野郎どもっ。」
杖を構え、
「行くぜっ！」

彼らは決戦の地へ、飛び立った。

―墓守人の宮殿・入り口

アーウェルンクスたち完全なる世界がナギたち紅き翼を迎える。

「やぁ。『千の呪文の男』…まさか、パイルドライバー以外の面々が、こうも我々を追い詰めるとはね。」

「この半年、まさかこれほどまでに数を減らされるとは思わなかったよ。…この辺りでケリにしよう。」

そして一気に戦闘体制をとる両者。

戦いが始まった。

……

紅き翼と完全なる世界の激しい戦いが繰り広げられる。

……

紅き翼の面々が完全なる世界を押し始める。

……

そして、

「うらぁぁぁぁっ！」

「くぁぁぁぁっ！」

ナギの魔法がアーウェルンクスを貫くのを最後に、決着した。

…

アーウェルンクスの首を掴み吊り上げるナギ。

「見事…理不尽なまでの強さ…。」

アーウェルンクスが賞賛する。

「黄昏の姫巫女は…どこだ？消える前に吐け。」

ナギが問う。
「フ…フフフ…まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思っているのかい？」
そして、ナギは思い出す。ハジメと別れた日に訪れた異常の者を。
「ま…まさか。」

「「っ！」」
その次の瞬間、一条の光がアーウェルンクスを襲う。

「なっ！」
ナギが驚いていると、
「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」
聞き覚えのある声の方へナギが顔を向けるとそこには、
黄昏の姫巫女を抱え、煙草を吸っている男。ハジメが立っていた。

…遡る事数時間前
ー主人公ｓｉｄｅー
ここが、墓守人の宮殿…か。
「くく。」
独りでに笑みが出る。墓守人…か。未だに諦められずに、足掻いているようにしか見えんな、造物主。
宮殿に侵入した俺は、まずあの無愛想娘を探すことにした。あれだけ、言っておいて攫われるとは…。まぁ奴らもそれだけ必死だったという事か。
魔力が入り乱れているな…、これが儀式の陣か。ならば、より入り

組んでいる場所に、源泉に無愛想娘がいるはず…。
ちっ。宮殿というだけあって、通路が入り組みすぎているな。地図を頭に入れてなければ迷うところだったな。
そして、大きな扉を見つける。この宮殿の中心より下、陣の中心。ここに無愛想娘がいるはず。
扉を開く。
「なるほど。…惨いことをする。」
そこには、まるで聖堂のような部屋があった。その中心に、無愛想娘が結晶の中に閉じ込められていた。
「今、開放してやろう。」
刀を構え、結晶を切る。
子気味良い音と共に結晶は砕け散り、無愛想娘が落ちてくるのを抱きかかえる。

「…ふむ。…死に損なったか…異界の者よ。」
部屋の天井より、声が聞こえる。
「なに、貴様を斬りに来ただけのこと。」
無愛想娘を脇に抱え、牙突を放つ。
「なっ。」
一条の光が造物主を襲い、天井を穿ち空を覗かせる。そして、天井に出来た穴から虚空瞬動で空へ抜けた。
外へ出ると、
「フ…フフフ…まさか、君はいまだに僕が全ての黒幕だと思ってい

るのかい？」
「ま…まさか。」
アーウェルンクスと鳥頭の会話らしきものが聞こえてきた。
おいおい。鳥頭、あの日造物主が来た事を忘れていたのか？
俺はアーウェルンクスと鳥頭たちがいる方向を確認した。
無愛想娘をしっかり脇に抱え、俺はアーウェルンクスへ向かって牙突を放った。
そして、紅き翼の面々がいる場所へ降りる。
「ふん。久しぶりだな、鳥頭。ちゃんとアリカの護衛はしていたか？」

…そして、時は戻る……

「はっ、ハジメっ。お前っ今までなにやってたんだよっ！みんながどれだけ…」
鳥頭が詰め寄ってきたので、無愛想娘を渡し、
「話は後だ。俺はこれから、奴と決着をつけねばならん。」
振り返り、空にいる造物主を見る。
「ふむ、今度はしっかり喰らっているようだな。」
「くっ…。」
ローブがボロボロになった造物主には、確かに牙突が喰らっている様が見える。

「鳥頭。無愛想娘をさっさとここから非難させておけ。」
鳥頭にそう言うと、
「ふざけんなっ！前もそうやって負けたんだろうがっ。」
む、鳥頭のくせに痛いところを突くな。

「なに、今度は負けはせんさ。今度こそ、奴を…『悪・即・斬』のもとに断つ」
そう言って、空を駆ける。

―side end―

「だぁっ。行っちまったっ。」
「ふふ。彼も頑固者のようですよ。我々は我々のできる事をするとしましょう？」
アルビレオがナギを説得する。
「ここにはわしが残る。ナギたちは、黄昏の姫巫女を安全な場所へ送るが良い。」
ゼクトが提案するのを、ナギはしかめっ面で、
「ちっ。あ～あ、姫さんに怒られそうだぜ。」
ゼクトを残し、ナギたちは宮殿を脱出した。

「さて、世界はどうなるのか…の。」

ゼクトはただ、空を見上げた。
そこには、造物主とハジメが対峙する姿があった。

第２０話（後書き）

申し訳ないですが、ほぼ原作引用です。

第２１話

青年は世界と決着する
そして戦争は終結する

第２１話
～決着～

影と影が交差するたびに、互いの攻撃の衝撃が周りを崩壊させていく。
「くく。くはははははっ。面白いっ。面白いぞ人間っ。」
造物主は幾多の魔方陣を宙に描き、その全てから魔法を放つ。
「ふん。貴様の生き様ほど愉快なものは無いと思うが？」
それら全てを斬撃で、切り捨てるハジメ。

「…人間如きが、我の…何を知るっ」
ハジメの周囲を魔方陣が囲む。

「ふん。諦められぬ、絶望をした振りをする者を、道化と言わずなんと言う。」
その全ての魔方陣をハジメは神速を持って切り刻む。

「…何が言いたい。人間…。」
魔力を溜め、ハジメに問う造物主。

「ならば問おう。人間に絶望した貴様が何のために楽園とやらを作った？」
同じく感卦法で身を高めるハジメが応える。
「度し難い人間は世界にいくらでもいる。ならばお前が認めた人間

を住ますのか？なら問おう。その人間の何を認めた？絶望したのではないのか人間に？貴様は心の奥では感じているはずだ。その希望を、だからこそ貴様は世界を作ったのであろう。…自らが知る希望に、すがりつけもしない貴様を、見ぬ振りをして絶望した気でいる貴様を…道化と言わずなんと言う？」

「黙れ…。黙れ、人間っ。全ては救えぬっ。なればこそっ、より輝いているものを救うのが我が悲願。」
造物主の前面に巨大な魔法陣が描かれる。

「全てを救えるわけなかろう。だがそれでも、諦めん奴を俺は知っている。そいつならば…たとえ明日全てが滅びようとも…、貫くだろうさ。」
ハジメの脳裏にアリカの顔がよぎる。
「貫く覚悟を失ったお前に、何かを救えるなど思うな。」
感卦螺旋法で更に高めるハジメ。
「覚悟しろ。貴様が見限ったこれが…」
ハジメは牙突を構える。
「人間の強さだ。」

ハジメの姿が掻き消える。
造物主の魔法が放たれる。

造物主の魔方陣から放たれた魔法が無数の光となってハジメを襲う。
しかし、その全てをハジメは突き破り、

造物主を貫いた。

「ふ、ふはははは。我を倒すか…人間。」
「ふん。俺より人間くさい貴様が言うな。」
「…はははははは。いずれ、また会おう。ハジメ」
笑いながら消えていく造物主。

崩壊しかけている宮殿に降りるハジメ。
「信じられぬのぅ。勝ってしまうとは。」
ゼクトが話しかける。

「ゼクトか、ちょうどいい。貴様に話がある。」
「む？なんじゃ？」

……
……
…

―ナギｓｉｄｅ―
「いねぇ。」
姫子ちゃんを安全なところへ連れて行き、俺も参戦しようと思ったら、もう入り込める余地なんて無かった。
だから、観戦してたわけなんだが。まさか、本当に勝っちまうとはなぁ。俺でもちょっときついと思うぜ。

で、終わったと思ってラカンたちと様子を見に来たら、いない。
ハジメどころかお師匠もいない。

「はっはっは。いやぁ、ものの見事にいねぇなぁ。」
「まさか、やられたのか？」
「造物主を倒していたのは、見ましたからやられたという事は、無いと思うのですが…。」
ラカンたちもやっぱりわからねぇよな。

「姫さんになんていえば言いんだよっ」
「そうですねぇ。正直にいないとおっしゃったらどうなるでしょうねぇ。」
「ワッハッハッハ。なんか面白い事になりそうだがな。」
俺は思わず頭を抱えたくなった。

……
…

「と、言うわけでハジメもお師匠もいなかった。」
「な、なんじゃと？」
うわぁ。姫さん顔怖いぞ。言わないけど。
「ハジメは生きておった。そして、お主らの前に現れた。」
「お、おう。証拠に姫子ちゃんここにいるじゃん。」
「なら、なぜここにおらん？」
「ハジメ…どっかいっちゃったの？」
あ、姫子ちゃん今それは禁句。
「ふふ。この半年、わしの前に現れもせんで…やっと現れたと生きていたと思ったら…、どこへ行ったのじゃっ。ハジメの奴はっ。」
うおぉ。怖い。くそっ全員逃げやがって、何で俺がこんな目に。畜生、ハジメの奴。
「いや、だから分からないっ」

「探せ…。」
「て、えっ？」
なんか、嫌な予感が…。
「探すのじゃっ。ハジメの奴を新世界、旧世界を問わずに探すのじゃぁっ」
「えぇぇっ？」
だからどこに行ったのかすら分からないって言わなかったか？俺。

「絶対に逃がさんからのっ。ハジメ」

王宮に姫の声が轟いたとか何とか。

―ｓｉｄｅ　ｅｎｄ―

―主人公ｓｉｄｅ―
「クシュンッ」
誰か噂でもしているのか？
「…大丈夫か？」
「あぁ。どうせ噂でもしているのだろう。」
そう言うと、造物主は笑みを浮かべ、
「貴様も大変だな…。」

「なに。いつものことだ。…で、どうだ。話に乗るか？」
造物主に問う。
「人間というものはどこまでも面白い。そうだな、乗るとしよう」

「では、準備からだな。俺は旧世界に行く。貴様は…」
「この世界と位相。魔方の構築じゃな。」
ふ、分かっているようだな。
「そういうことだ。資料はここに旧世界のものもある。後で読んでおけ。」

暗い部屋から出る。
「ではな。」
別れを告げる。
「貴様も達者でな。」
造物主も応える。

さて、旧世界へ行くとしようか。

第２１話（後書き）

さて、戦争編も終わりました。若干強引な事は否めませんが。
これから数話、幕間のような後日談のようなものを書いてから、原作に入りたいと思います。ではまた。

幕間１（前書き）

戦争編が終わったのでこれからしばらく幕間になります。戦争中、戦争後を含めたものになると思います。時系列は余り気にしておりませんのであしからず。

幕間1

青年は自らの想いを知る
騎士と姫は結ばれる

幕間1
～結婚～

―主人公ｓｉｄｅ―
「ハ、ハジメ。ど、どうかの？おかしなところはあるかの？」
アリカが純白のドレスを纏って、俺に聞く。

しかし、アリカの美しさに見惚れていた俺には、それに応えるには少々時間が必要だった。

…遡る事1週間前
造物主との戦いが終わってから、早くも1年が過ぎようとしていた。
アリカたちも忙しいとは思うが、俺が暗殺などで稼いだ金で開いた学校の卒業生がそろそろ力になるだろう。クルトもなかなか内政などでいい線いっていたしな。

俺は今ある目的のために旧世界に来ているわけだが、
「なぜ、貴様らここにいる？」
鳥頭とその愉快な仲間達が俺の下に来た。

「そりゃ、もちろんお前と決着つけるためっ」
「ちげぇよ。」

すごむラカンに突っ込む鳥頭。

「まぁ、俺も決着つけたいんだけどよ。今日は違う目的でお前を探してたんだよ」

「ええ。それとあなたに訪ねたいことがありましてね。」

む。何かばれたか？まだこいつらに知られるわけにはいかないのだが。

ナギが口を開く。

「お前。姫さんあ、今は女王か。まぁいいや。姫さんのこと、どう思ってんだよ。」

「…なに？」

少々理解するのに手間取る。

「どういうことだ？」

「だーかーらよっ。お前がアリカ姫のことを好きなのかどうなのかって聞いてんだよっ」

ラカンがナギの言葉に補足する。

俺が、アリカの事が好きかどうか…。

そして、思い出されるのは造物主と最後に戦ったとき。俺は確かにアリカの事を思い描いていた。それと同時に思い出されるのは、アリカを護衛していたときの事…あの夕日の見える丘で、俺は確かに…アリカに見惚れていた。

くく、なるほど。俺はどうやら、アリカの事が好き…だったようだな。まさか、俺が人を好きになる事があろうとは。しかし…

俺は手を見ながら、答える。
「くく。今更気づく時点でどうかと思うが、たしかに俺はアリカの事が好きなようだ。…だが、この手は余りに血に塗れている。」
そして、鳥頭たちを見ながら、
「そんな俺が、奴の前に姿を見せる資格があると思うか？」

「ふふふ。思ったより素直に感情を吐露したかと思えば…。しかし、ナギに似て、変な所で臆病ですね。」
アルビレオが少し可笑しそうに言う。
「なっ。誰がこんな冷血野郎に似てるだって？」
「ワッハッハッハ。」
「笑うなっ。ラカン、てめぇ。」
なぜか、殴りあい始めるラカンと鳥頭。

「アリカ姫が今更そんなことを気にするお方ではない。俺らと一緒に来てくれるか？」
詠春が問うてくる。
「ええ。アリカ姫の気持ちを知ってからでも遅くは無いでしょう？」
アルビレオも微笑を浮かべながら、俺に聞く。

「…ならば、行ってみるか。顔も見たいしな。」
思い出すのは、あの強い光を宿した瞳。行くのも吝かではないな。

―王都オスティア
「ひ、久しぶりじゃの。ハジメ。」
「あぁ。久しいな、アリカ。いろいろと忙しそうだな。」
王室ではなく、私的な部屋だがある程度は広い場所で俺はアリカと向かい合っている。

「当たり前じゃろ。どっかの誰かさんは生きておったというのに、私の前には現れず、旧世界に行っていたというのじゃからな。」
俺をジトッとした目で睨んでくるアリカ。
「くく。なに、これからはアリカを始め、皇女やマクギルで平和の礎を築くのだろう？俺の出番は無いほうが良かろう。」
「ふふ。それもそうじゃの。まぁ、マクギルがお主を真剣に探しておったがのぅ。」
―それは主にアリカのせいだとは、この場に突っ込むものは居ない。
それからも他愛の無い話をしていく。
久しいな。楽しいと感じるこの感覚は…。俺は思った以上に目の前に居る奴に惚れているのかもしれない。

「そ、それでじゃの。ハジメ。」
「ん？」
突然、挙動不審になるアリカ。
「こ、これはの。…ナギたちに聞いたのじゃがの。」
「今日、ここに来たのは、わ、私にお主が…気持ちを教えようと思って来たのじゃと、聞いたのじゃが。」
俯いてうっすらと、紅くなっていくアリカの顔。
「っ。…あぁ。そうだな。そろそろ、ごまかしも効かなくなってきたようだしな。」
だめだ。…何だこの感情は。アリカが、その挙動すらも愛おしいと感じる。
俺は、アリカに近づき、その手をとる。
「なっ。ハジメ…？」
驚いたのかアリカが顔を上げる。その顔は随分と赤い。そして、きれいだと思う。
「アリカ。」

「はっ、はい。」
心を落ちつかせる。まさか、これほどまでに、アリカの事が好きだったとはな。

「アリカ。俺はお前の事が好きだ。できるならば、お前と共に…これからを生きていきたい。俺についてきて…くれるか？」
言った。アリカとならば、この先の困難もすべて乗り越えられよう。
アリカは目の端に涙を溜め、
「は、はい。」
そして、静かに唇を合わせた。

そして、冒頭に戻る。…
あの後、さっさと結婚式やらなにやらと、どんどん準備が進んでいった。マクギル…用意が良すぎだろう。普通王族が結婚するのに、もっと手順があると思うのだが。そして、俺は白い礼装を着け、アリカのところに連れて来られたのだが、

「だ、黙るでない。ど、どうなんじゃ？」
顔を紅くするアリカ。まだ答えていなかったな。
「…あっあぁ、すまんな。…見惚れるほどにきれいだぞ。アリカ。」
「そ、そうか。良かった。」
途端に笑顔になるアリカ。その笑顔が愛おしい。
「では、行くか。」
手を差し出す。
「うむ。よろしく頼むぞ。我が騎士よ。」
俺とアリカ。その間にはしっかり握られた手があった。

結婚式はパレードのように街を回るものとなった。手順を踏まなかった事も考慮したそうだ。
街を埋めている、凄まじい人の数を見ても、アリカの人気が伺える。
「アリカ様〜。」
民達がうれしそうにアリカに手を振っている。それに笑顔で応えるアリカ。
民達のうれしそうな顔を見て思う。
やはり、俺の目に狂いは無かったな。アリカはこの先、礎を築く重要な役目となるだろう。
「これ、お主ももっと応えんか。お主も英雄なのじゃぞ。」
そんなことを考えていると、横に座っているアリカに言われる。
「俺が、英雄？」
「なんじゃ。知らんかったのか？あぁ、旧世界に行っておったのじゃったな。」
話に聞くと、どうやら俺がパイルドライバーであったのは周知の事実になったらしい。さらに、それは悪徳なる政治家や闇商人を殺しておったのだという話であり、たった一人で、世界といち早く戦った英雄として民達に認識されているらしい。ちなみに情報源はマクギル。あの爺…。

「騎士様〜。アリカ様を守ってね〜。」
子供の声に、手を振りながら応える。どうやらパイルドライバーよりも、アリカを護衛していた『騎士』という通り名の方が、俺として認識されているようだ。
「ふふ。しっかり守ってくれよ？騎士様。」
いたずらっぽい笑みを浮かべこちらに言うアリカ。
「当然だろう。愛しい者を守るのは、男として当然の事だ。」
そう言って、アリカの顔を引き寄せる。
周りの喧騒も大きくなる中、少々顔を赤めるアリカと唇を合わせた。

このパレードも、まだまだ終わりそうにない。

…これからもよろしくの？ハジメ

…ああ、こちらこそよろしく頼むぞ。アリカ

幕間１（後書き）

まずは、アリカとの結婚式を書きました。どうでしたでしょうか。
いやぁ、ラブコメも難しいですね。
次回は何書こうかな。マクギルの方面とか考えています。ではまた。

幕間2

少年は世界の裏を知った
されど少年の夢は明確に

幕間2
　～先見～

―マクギルｓｉｄｅ―
「ふぅ。」
今日まで済ますべき案件を全て済ましたわしは、椅子の背もたれに背中を預け、一息つく。
「お疲れのようですね。どうぞ。」
コーヒーを淹れた秘書のクルト君がわしに声をかけ、コーヒーを机の端に置く。
「ほほ。なぁに、ハジメと出会った時から苦労する事になるとは思っておったわ。」
そう言いながら、コーヒーを飲む。うむ、うまいのぅ。

クルト君はもともと紅き翼の面々についていった者の一人じゃった。まぁ彼はアリカ女王に惹かれていたのもあったのじゃろう。そこでクルト君は、ハジメに出会った。

クルト君はもともと、暗殺などの類が大嫌いで大変じゃったのぅ。

……
「なんで、あなたほどの力がありながら。なんで、こんな事をするのですかっ。ハジメさんっ。」

まるで、夢破られた少年のようなクルト君の問いに、煙草を吸いながらハジメはそれに応える。
「阿呆か。小僧、人一人の力がどれだけ無力なのか知っているか？小僧が言う、汚い手段とやらで手に入れた情報で、国一つ滅ぼす力を持っているのを知っているか？」
ただ、淡々と述べながらクルト君に近寄るハジメ。

ハジメの姿が消えたように見えた次の瞬間、
「がぁっ」
ハジメがクルト君を頭を掴んで地面に叩きつけておった。
「小僧。俺がどれだけ、貴様を叩き伏せる事ができたとしてもだ。それは国を左右できる力ではない。」
「うぅっ。」
地に這いつくばっておるクルト君を尻目に、ハジメは用が済んだとばかりに部屋から立ち去る。
「小僧。それでも納得できないというならば、マクギルの下に着いて、世界を…人の醜さを知れ。」
立ち去る間際にハジメがそういい残した。

全く、素直では無いのぅ。

「大丈夫かのぅ。クルト君。」
「…マクギルさん。僕が見ていたのはきれいなだけの外側だけだったのでしょうか？」
俯きながらクルト君が問うて来る。
「否定はせん。ハジメが言っておった事もじゃ。」

クルト君が手を握り締める。

「マクギルさん。僕を、僕を秘書にしてください。ハジメさんが言

っていた事がどういうことなのか。僕は、自分で知らなきゃいけないっ。」
ふぉ。ハジメの奴…これを狙っておったのかの？だとしたら、本当に敵に回したくないのぅ。
「ふぉっふぉ。良かろう。未来あるものを導くのもわしの役目じゃろうて。」

……

あの後のクルト君の成長は凄まじかったのぅ。国の醜い部分を見てもなお、いや、見たからこそ、自分が何をすべきなのか分かったのじゃろう。
もう立派な政治家じゃ。いつ、わしのあとを継いでもらおうかのぅ。楽しみじゃ。

楽しみといえば、ハジメがいつの間にか作っておった、これから先を担うものを育てる学校の卒業生達もすごいのぅ。政治だけでなく、教育や魔法学においてももうすでに名が知れているものもおる。ありえんことじゃ。

しかも、ハジメが作った学校の教師陣がまたなんとも言えん。ハジメ曰く、
「この先を担うものたちに必要なもの？そんなものは全てだ。必要で無いものですら、活用する。それが出来ないような人間に先は担えん。」
厳しいと思ったものじゃが、それを実際に行うものたちを見てたまげた。すでに隠居した、高名な魔法使いを始め、優秀であった政治家、役人、果てには犯罪者すら雇っておった。
まぁ優秀な者ばかりなので助かってはおるんじゃが…ハジメにしか

できんな。あんな事。

「しかし、きれいでしたね。アリカ様。」
先日の結婚パレードの事を思い出しておるのか、クルト君が嬉しそうな顔をしておる。
「少々残念だった気がしないのかな？クルト君。」
悪戯心のままにクルト君に聞く。
「いえ、ハジメさんならきっとアリカ様を幸せにしてくれるはずです。」
「世界を敵に回してでもするじゃろうな、ハジメなら。」
「はいっ。きっと僕にはできない事です。」

「そういえば、ハジメについてクルト君。君の答えは見つかったかの？」
昔のことを思い出したついでにクルト君に問うてみる。
「いえ、まだ分かりません。結果的にハジメさんがやってきた事は、正しい事でした。でも、やっぱりまだ納得は出来ないです。」

「そうか。だが、答えを求める事はやめちゃいかんぞ？」
「もちろん、そのつもりです。いつか、いつかハジメさんに答えられる日が来るまで。」

ふぉっふぉっふぉ。本当に先は明るいのぅ。

「それじゃ、マクギルさん。こちらが明日までに必要な資料です。」
擬音が聞こえてきそうなほどに、積み上げられた資料の束を持ってくるクルト君。
「さぁ。民達のために頑張りましょう。」
ふぉっふぉっふぉ、眩しいのぅ。さて、わしも頑張らねばならんの

う。

幕間2（後書き）

というわけで、マクギル視点でした。
次はどのような話を書こうかな。ではまた。

幕間3

世界を救うピース
それが使うには時がいる

幕間3
～役割～

戦争が終結し、早3年。
ここはM・M（メガロ・メセンブリア）首都。マクギル元老院議員の邸宅。

そこには、世界を救いし英雄達が揃っていた。
「さて、集まってもらったようだな。」
口を開いたのは、騎士と呼ばれる男ハジメ。
「ったく。決闘かと思ったら、なんだ堅っ苦しいなぁおい。」
愚痴を言っているのは、千の刃の男ジャック・ラカン。
「ラカンさん。これから、大事な話があるんですから。そんなにだらけないでください。」
そんなラカンに小言を言うのは、クルト。

「構わん。どうせ、そいつらに言う事は無いに等しい。…というか、貴様らを呼んだ覚えは無いんだが。」
ハジメがさも鬱陶しいかのように、疑問を口にする。
「そうだったのか。すまんな、俺が呼んだ」
その疑問に答えるものはガトウ。気まずそうに頭をかいている。

「けっ。頭使うかったるい事は、ハジメたちがちゃっちゃとやっちゃえよ。」

「心配するな、鳥頭。誰も貴様の頭に期待しちゃいない。」
煙草を吸いながら片手間で言い放つハジメ。
その言葉に口を引きつらせる、鳥頭こと千の呪文の男、ナギ。
「上等じゃねぇかっ。てめぇとはいい加減決着つけたいと思ってたんだっ。この野郎。」

紫煙を吐き出しながら、煙草の火を消すハジメ。
「では、今回集まってもらった理由を話そう。」
「無視すんなっ」
ナギが叫ぶ。が、そんなことは無かったように話を続けるハジメ。
ナギが部屋の隅で、いじいじしている。

「話は簡単だ。この世界。魔法世界のその行く末に着いてだ。」
その言葉に、真剣な目つきになる面々。
「魔法力の枯渇…だったか。その解決法でも見つけたのか？ハジメ。」
ハジメに問う詠春。

「魔法力の枯渇に関しては、すでに考えはまとまっている。これから少し時間と技術を有するがな。」
「それは、またすごい事を簡単に言いますね。…では今回集まった理由は、魔法世界の亜人たちですか？」
ラカンを見ながらアルビレオが、今回集まった理由を推測する。

「ああ、そういうことだ。これに関してはまだ、その方法を確立させていない。故に貴様らに頼みたい事は…」
「その方法の模索ですか？しかし、あなたらしくない。もうある程度目星はついていると思ったのですが。」
アルビレオが驚いた様子でハジメに聞く。

「いや、それに関してはすでに、げぼ…協力者がいる。そして、俺も本腰を入れて調べている。…貴様らにやってもらいたい事はそれの仕上げだ。」
アルビレオの問いに言葉を選びながら喋るハジメ。

「協力者…ですか。失礼ですが、どちらさまでしょうか？」
アルビレオが目を細めながら問う。
それに対し、ハジメは少し逡巡し、
「ふぅ、…言っても構わんか。…造物主だ。」

その言葉に面々が驚きに目を見開く。
「なっ。どういうことじゃ。奴は、やつは生きておったのかっ？」
ハジメの隣にいたアリカが、戸惑いながらハジメに問いを投げかける。
「おいおい、やっこさんが生きていたのも驚きだが。…ハジメ、お前奴を許したのか？」
ラカンもハジメに問う。
他の面々も言葉は発しないが、同じような疑問が胸中にはあった。

「奴を許す事は無い。これから先もな。だが、奴には生きてもらわねばならん理由がある。ある時まではな。それに、奴の知識とやらも世界を救うためには有用であろう？」
言外に、それほどのことをしなければ、世界など救えはしないとハジメは言っていた。
「じゃが、…奴は、奴は。」
それでも、納得できないアリカは、ただ口ごもる。
そんなありかの頭に手を置きなでるハジメ。
「なに、納得するもしないもこの世界を作ったのは奴だ。ならば、最後の尻拭いは奴にやらせるべきであろう。」

「では、貴様らにやってもらいたいことについて、説明する。」
面々を見ながらハジメが続ける。
「まず、マクギル、アリカ、クルトにガトウ。この世界の政治体制を変えて貰う。競争し、向上するならともかく、腐敗していくのは唯の怠慢だ。後で、その辺りの話しをする。時間を空けておけ。」
アリカやクルトを見るハジメ。
それに対し、頷くアリカやクルト。

「次にそれ以外の奴らというより紅き翼(アラルブラ)。貴様らには新世界・旧世界で暴れてもらおう。紛争地帯を片っ端から片付けろ。救える者がいれば片っ端から救え。いくら金を使っても構わん。だろ？マクギル」
マクギルを睨みながら喋るハジメ。
「も、もちろんじゃ。議会は通す。」
なぜか焦りながら答えるマクギル。
「お前らには、詳しい解決法が出来次第協力してもらう。特に、鳥頭とアルビレオ。貴様らにはやってもらいたい事があるしな。」
「ええ。分かりました。面白そうですねぇ。」
笑みを浮かべながら了承するアルビレオ。
「お、なんだ。傭兵まがいの事か。いいねぇ、最近暴れてなかったからよぅ。」
やる気を出し始めるラカン。
「私は、そろそろ妻を娶るのだが…。」
嬉しそうに言う詠春。
「あぁ、近衛の者とか。なに、貴様にもやってもらいたい事がある。そのときまでは、暫くは休んでおけ。」
あっさりというハジメ。

「まぁ話は以上だ。あとで詳しい情報などが手に入れば、渡す。ではな、貴様らはやるべきことをやってくれ。」
そう言って、アリカをつれ退散するハジメ。
各々も解散して各自がやることに専念し始める。

そして、これから数年紅き翼の活動は目覚しく、偉大なる魔法使いとたたえられるようになる。

幕間3（後書き）

下準備な話でした。余り説明してしまうと、ネタばれしてしまうので難しいです。そろそろ最後の終わり方は構想まとまったので、あとはどう原作に介入するか考えている日々です。もうすこし幕間は続くと思います。

いつも読んでいただきありがとうございます。ではまた。

幕間４

誰しも意地というものがある
青年も例外ではない

幕間４
　～意地～

英雄達がその役割を確認しあった集結より少し後、
見渡す限りの原野において、ハジメとナギは距離をとって向かい合っていた。

「準備はいいか？ハジメっ。」
杖を構えるナギ。
「構わん。いつでも来い、鳥頭。」
刀を抜くハジメ。

…なぜこのようなことになったかは時を少し遡る。

王都オスティア。執務室にハジメはアリカはいた。
普段は、世界救済のために旧世界と新世界を往来しているハジメだが、数ヶ月に一月ほどアリカのために王宮にいる。
主に護衛として、そして秘書としての仕事をしていた。

「王族に、これほどまでの決定権があるのは、やはりまずいものがあるな。」
仕事の内容から、これから先の政治の案件を頭に入れながら仕事を

こなすハジメ。
「ふむ。確かに、M・M（メガロ・メセンブリア）や帝国とはまた違う体制じゃからのぅ。」
ハジメの言に、そう返すアリカ。
そんな会話を織り交ぜながら、黙々と仕事をこなし続けるアリカとハジメ。
仕事も一息つこうとしたとき、王宮が騒がしくなる。
「む？何かあったんじゃろうか？」
「…、鳥頭が来たようだ。」
若干疲れた顔をするハジメ。
そして、執務室の扉が勢い良く開かれた。
「ようっ。ハジメっ、戻ってきたみたいだなっ。」
ナギが笑みを浮かべながら、入ってくる。
「はぁ。何のようだ？鳥頭。」
思わずため息をつきながらも質問するハジメ。
「何って、決まってるだろっ。…そろそろ、決着を着けるときじゃねぇのか？」
握り拳を出し、挑発的な笑みをするナギが答える。
「貴様もこだわる男だな。」
呆れた口調で言うハジメ。
「前は負けちまったが、今度はそうはいかねぇ。ちゃんと広ぇ場所はとっといたぜ。魔法も何も気にする事はねぇ。」
「ふむ。」
ふとアリカを横目で見るハジメ。
「ふふ。やってみてはどうじゃ？どちらが強いのか妾も知りたいぞ？」
どうやらアリカも乗り気である。

ハジメは観念したように、されど目は鋭く、
「良いだろう。では、行くとしよう。」
「へへっ。そうこなくっちゃな。じゃ、行くか。」

…そして冒頭に戻る。

「雷の暴風(ヨウイス・テンペスタース・フルグリエンス)っ。」
ナギの魔法が雷となって、ハジメ目掛け放たれる。
「破ぁっ。」
ハジメの牙突が、斬撃となってナギに向かう。

雷と斬撃が衝突し、弾ける。

両者は、それがさも当然かのように笑みを浮かべる。
「小手調べは。」
「いらねぇようだなっ。」
両者の姿が掻き消え、ただ衝撃だけが、２人が鬩ぎあっていることを証明していた。

―観客ｓｉｄｅ―
「おうおう、やってんなぁ。俺もやりてぇぜ、おい。」
ラカンが2人の戦いを見ながら、そんなことを呟く。
「今は、どちらが優勢なのじゃ？」
アリカがラカンに問う。
ラカンが要る理由。それは、アリカの護衛。アリカも2人の戦いは見たかったのだった。他にもアルビレオも護衛としてついてきている。

「うーん。接近戦のときは、やっぱりハジメだな。やつのその攻撃の圏内は、俺も出来ればいたくねぇ。」
ラカンはまずハジメを評し、
「だが、一度離れりゃ、ナギが大魔法ぶっ放しているな。あれは、やっぱりハジメもきついだろう。」
そう解説する最中、
「…千の雷（キーリプル・アストラペー）っ。」
ナギが大呪文を放つ。あたり一面に稲妻が走る。
「おっと。あぶねぇな、おい。」
こちらに少し飛び火したものを、ラカンが気合防御で打ち消す。
「破ぁぁぁっ。」
稲妻が走る中、それを打ち貫いてハジメがナギに向かい抜きでる。
「ちっ。」
それに対し、雷を槍の形に収束させた者を放つナギ。
瞬間、爆発を起こし辺り一面に衝撃が広がる。その衝撃で周りの山々は崩落を始める。

戦いは続いていく。

「いやぁ、すごいものですねぇ。2人の戦いは。」
アルビレオがいつも通りの、真意が分からない笑みを浮かべながら言う。
「ふむ。じゃが、いつまでかかるのかのぅ。最早、昨日までの荒野、山々の光景がただの焦土と化しておる。」
アリカが若干呆れたように呟く。
すでに、数時間が経っていた。

―side end―

「はぁっ、はぁっ、はぁっ。いい加減倒れろよハジメっ。…もう刀握ってる手が震えてるぜ？」
左腕と左足を切り傷だらけにし、脇腹には穴が開き血まみれのナギが言う。
「ぜぇっ、ぜぇっ、ぜぇっ。貴様こそ、…出血多量で今にも倒れそうだぞ？鳥頭。」
右腕は焼かれ、体中がボロボロになっている、こちらも血まみれのハジメが言う。

言い終えた両者は、笑みを浮かべながら、
「「……はっ。バカを言うな、倒れてなどしてたまるか。」」

お互い杖を、刀を構える両者。
ナギはその身の魔力を高める。
ハジメはその身に感卦螺旋法を宿す。

両者の間に静寂が宿った瞬間、
両者の技が放たれた。

ナギは雷の大槍を振るう。
ハジメは牙突を放つ。

両者が激突した瞬間に、天は割れ、辺り一面に粉塵が舞い上がった。

その光景を見て、どちらが勝ったかを見極めようとする観戦していた面々。
粉塵が晴れる。

そこに、立っていたのは…ハジメであった。

―主人公ｓｉｄｅ―
「はぁっ、はぁっ。」
ちっ、危なかった。いや、違うな、今にも倒れそうだ。
「がはっ。てめぇも限界のはずだろ…。なんで立ってられるんだ？」
倒れ付している鳥頭が聞いてくる。

「…なに。好いている奴が見ている前で…倒れるわけにいかんだろう？…意地というやつだ。」
「ハジメ～。」
そう叫びながらこちらに走ってくるアリカを見る。

「けっ。意地だって…俺にだってあらぁ。」
そう言って、手をつく鳥頭。
「まだ、やる気か。」
自然と笑みが浮かぶ。…やはり、阿呆だこいつは。

だが、…面白い。

「あったりまえだぁっ。はぁっ、はぁっ。」
立ち上がる鳥頭。
そして、こちらに拳を振りかざす。

だが、忘れるな。接近戦（この距離）は俺の距離だ。
鳥頭の拳をよけ、鳥頭の右頬に左の拳を打ち抜く。

「がはぁっ。」
それでも、倒れんかっ。
なお、こちらに向かってくる鳥頭。その拳が俺を射抜く。
だが、もはや…その拳に力は無かった。

「くっ。いい加減に、…眠れっ。」
鳥頭の頭を鷲掴み、地面に叩きつける。

「はぁっ。少しはお前の事を認めてやろう。…ナギ。」
ふらふらになりながら、近くまで来たアリカのもとへ歩いていく。
「全く、バカじゃのう、男というのは。」
そう言って笑うアリカ。
「ふん。…意地というものだ。」

「お～い。大丈夫か？ナギぃ。」
「ふふふ。気を失っているようですねぇ。」
ラカンとアルビレオがナギのもとへ寄っていく。

全く、阿呆らしくなってきたな。
だが、こういうのも…悪くは無い。
ナギとの勝負を思い返しながら、俺はそう思っていた。

幕間４（後書き）

ネタも話も浮かばないＧ－ｑａｚです。結局、昨日も今日も一話だけで終わってしまった。
というわけで、ナギとの戦いでした。勢いだけですので読みにくいと思います。
文才が欲しいと切に願う今日この頃。ではまた。

幕間5

騎士の剣は折られた
されど青年の牙は折れぬ

幕間5
～相棒～

―主人公ｓｉｄｅ―
アリカの仕事も終わり、共に部屋へ向かう途中。
「のぅ。ハジメ。」
「ん？どうかしたか？」
「いや、そういえばハジメがいなかった半年間があったじゃろ。そのとき、ハジメが何していたのか気になっての？」
アリカが戦争中、俺がアリカたちと行動を共にしていなかった日々の事を聞いてきた。

そういえば、言ってなかったか。
「それに、その腰に携えている剣。最初にハジメと会ったときとは違う物じゃよな？」
そう言って、俺の腰元にある刀を見るアリカ。
「ふむ、そうだな。では、あれからのことを話すとしよう。」

……時は俺が造物主に敗れた後まで遡る
最後の衝突の瞬間に意識を手放した俺は、激痛に目を覚ました。
体がボロボロになっていた俺だったが、なんとかその命をつなぎとめていたことを、そのときに知った。

「…ぐっ。あああぁぁぁっ」
しかし、凄まじい激痛が俺を襲い続けた。
激痛に意識を手放し、激痛で目覚める。それを幾度か繰り返していると、
「ほぅ、目を覚ましたか。やはり、無茶苦茶だわ。お前さん。」
懐かしい声がした。
「ほれ、これを良くかんで飲め。幾分か楽になるはずだ。」
俺の口に何かが入れられる。俺は空腹からか、躊躇い無く噛んで飲み込んだ。
「っ。」
「かかか。苦かろう。しかし、良薬は口に苦しと聞くぞ。」
俺の苦悶の顔を見て、笑っている男。
「くっ。なぜ、貴様がここに…？」
「そりゃ、こっちの台詞だぁ。ハジメ。驚いたぞ？ボロボロで今にも死にそうなお前が、俺達が良く戦っていたあの荒野に倒れていたときは。」
その言葉を聞いた俺は、愕然とする。
「…ここは、龍の山脈という事か。」
あの瞬間に跳ばされたか、俺が無意識にこの空間への入り口を紡いだのか…。
「とりあえず、礼を言おう。だいぶ楽になった、ナーガ。伊達に長生きはしておらんな。」
そう言うと、ナーガは胸を張り、
「おう。ここら一帯の長だしな。」
ナーガ。今は人の姿をしているが、その真の姿は巨大な龍であり、俺が初めて負けた相手でもある。この地では、こいつに鍛えられたようなものだ。

「それで、いったい何があったってんだ？お前が、そん所そこらの奴に負けるとは思えねぇんだがよ。」
ナーガが目を鋭くさせながら俺に問う。
俺はこの龍の山脈を出てからのことを要約して話した。
「ほうほう。お前がね。それは人の世では英雄と呼ばれる人間になのではないか？」
肩をすくませながら、ふざけた口調で言うナーガ。
「くく。それはないな。俺は表に出れるようなことは何一つしてはいない。」

「それで、これからいったいどうするんだ？ハジメ。剣も折られちまったんだろ？」
「旧世界に行くつもりだ。まず、奴の、造物主の目的が踏み違えている事を、奴の眼前に叩きつけねばならん。それから、刀を仕入れる事だな。」
造物主のとの戦いでこの世界にきてからというもの、幾多の修羅場を潜り抜けてきた相棒が折れたことを思い出す。
それを聞いていたナーガは、
「前者はまぁお前しだいだろうが、後者は無理だな。」
と刀の件について、そう言ってきた。
「…なぜだ？」

「お前は知っていたかどうか知らんが、あの剣は恐らくお前のために作られたものだ。刻印を解析してみたからこそ分かるが、あれはとりわけ頑丈に出来ていた。…良く考えてみろ。貴様の牙突…あれに耐え得る剣など、本来はありえん。」
牙突…確かに、ただの剣では簡単に折れたことがあった。最近では感卦法など、あの刀には上乗せしながらの技ばかりであったな。

それが、あの刀の限界を超えた？
「あの技は突貫力に特化している。普通の剣では言わずもがな、上等な剣ですら１０回も持たん。」
刀なくして、奴に…造物主を倒す事ができるのか？
…難しいであろうな。

「それでだ、ハジメ。お前久々に戦ろうじゃねぇか。お前がどれほど強くなったかを知りたい。…もう回復したろ？」
突然提案してきたナーガ。
「回復はしたが、刀をどうにかする方が先だ。」
「だからよ、凄まじく頑丈でなおかつ魔力時を通しやすいものだろう？あるじゃねぇか、すぐ近くに。」
刀のことを考えなければいけない俺に、ナーガはそんなことを言う。
「なに？…まさか。」
「おう。俺は龍だ。俺の爪か牙を抜いて見せろ。後はそれを、お前の思うとおりに加工すればいい。刻印も施せば、件の奴にも効くだろう？」
「俺にあの姿を相手にしろと？」
「かっかっか。強くなってんだろ？期待してるぜぇ。…ここでくたばるようなら、てめぇの信念も高が知れてるって事だ。」
言ってくれる…この阿呆が。
「ふふふ。面白い。貴様の牙一つといわず全て抜いてやる。後悔しろ。」
体を起き上がらせながら、ナーガを睨む。
「かっかっか、やってみろよ。」

場所を荒野へ移す。

「さてさて、この姿になるのもお前が出ていって以来か。久しいな。」
膨大な魔力を放出するナーガ。
放出された魔力によって、辺り一面に暴風が起きる。
「ふん。結局その姿の貴様には勝つ事は無かったな。だが、今日は勝たせてもらうぞ？戦利品は貴様の牙だ。」

「はぁぁぁっ。」
ナーガの身に一気に魔力が収束する。
周囲の大地がひび割れる。
巨大な体躯、柱を思わせる太き爪、鋭い牙を宿した竜王（ナーガ）の名に恥じない姿となった。

「では、やるとするか。」
ナーガが言い放った瞬間、ナーガが凄まじい速度で飛び上がる。
そして、急降下。その勢いのまま爪を振り下ろす。
「でかい図体をしておきながら、相変わらず恐ろしい速度なことだ。」
それを避けながら、どうやって奴にダメージを食らわせられるか考える。

「…避けてばかりでは、俺には勝てんぞっ。ハジメッ。」
口内に魔力を収束させるナーガ。おいおい、本気だな。
「かぁっ。」
ブレスを放つ、ナーガ。咄嗟に上空に跳び、圏外へと逃げる。
辺り一面を溶かしつくすナーガのブレス。
「かっかっか。甘いぞ？ハジメェ」
「なっ。」
俺の眼前にいるナーガ。この距離はまずいっ。

刹那振るわれる爪に、俺は防御しながらももろに喰らってしまう。
「がはっ」
さらに、ナーガの攻撃は続く。
爪、殴打、魔法、そして、
山に埋め込まれた俺に、魔力を収束した砲撃を放つ。
その砲撃は俺を巻き込みながら山を一つ消す。

砲撃に吹き飛ばされた俺は、唯倒れ伏していた。
「おいおい、そんなもので、世界を救うなんて甘っちょろい事言っているのか？ハジメ」
上空に飛び続けながら、ナーガが嘲るように言う。
「お前の信念はそんなものか？貫くと決めたのでは無いのか？…そんなところで倒れている暇があるのならっ、俺を倒す事だけを考えろっ。」
言われなくても分かっているっ。俺は手を突いて、立ち上がる。
「（くく。目がまだ死んではいない…か）まだ、やるきか？」
未完成などとは言ってはおれん。
感掛螺旋法を行う。ただ、爆発的な威力を持って…奴を、ナーガを一発ぶん殴る。

ナーガを睨む。
たとえ、血だらけだろうが、なんだろうが、俺が屈するときは死ぬときだけだ。

「いくぞ…ナーガっ。」
一気にためた力を解放させる。ナーガから見ても消えたようにしか見えんはず。
「っ。」
その勢いのまま、ナーガの顔に向けて、ただ、渾身の一撃を持って奴を貫く。

「破ぁっっ。」
「がぁっ。」
もろにそれを喰らったナーガは吹き飛ばされた。
その牙を一つ宙に翻しながら…。
それを見た俺は、笑みを浮かべながら意識を手放した。

目を覚ませば、俺はナーガの住処にいた。
「よぅ。気がついたかこの野郎。」
人型の姿をしたナーガが、機嫌悪そうに隣に座っていた。その奥には、でかい牙があった。
「なんだ。口が痛いのか？ナーガ。」
思わず笑みを浮かべながら、ナーガに言う。
「起きた直後にご挨拶だな。ったく、しかし、本当に持ってかれるとは思ってなかったぜ。あの最後の奴ありゃなんだ？」

「あぁ、あれは感卦法のままさらに感卦法を行う。感卦螺旋法と名づけた。まだ、未完成だがな。」
あれは完成させねばならんな。不安定すぎて使う気になれん。
「ありゃ、面白いな。器がお前じゃなければ使えないようなバカな技だが。…言ってみれば、お前だけの技か。」
「器？」
気になる単語が出てきたので思わず問う。
「なんだ。知らねぇで使ってたのか、危ねぇなぁおい。…器ってのは気や魔力、それを使える上限ってところだ。それがでかけりゃ大呪文もとんでもねぇ技も使える。…器だけで言えば、お前は古龍種よりも大きく感じるほどだからな。」

ほぅ。なるほど、鳥頭があれほどの魔法をつかえるのは器がでかいからか。

「…俺の器が古龍種よりも大きいだと？」

「感覚としてだがな。じゃなければ、感卦螺旋法だったか？あんなもの使えば、爆発しちまうよ。自爆技だ。」

随分と恐ろしいものを考えたものだな、俺も。

「さて、さっさとこの牙を加工しちまうか。刻印も俺がしといてやるよ。前の剣を覚えてるからそれと一緒でいいだろ？」

そう言って立ち上がるナーガ。

「ああ、感謝する。」

「いいってことよ。面白かったしなっ。」

そう笑みを浮かべ、奥に行くナーガ。

それから数日で、ナーガは刀を完成させた。

「どうだ。」

刀を振りながら、その感触を確かめる。

「悪くない。なぜか、あの刀のように手になじむ。」

「あぁ、そりゃたぶんその刻印だろうな。良く分からないものが多かったが、きっとこの刻印は恐らく、お前が使わなければ意味無いんだろうなぁ。」

ほぅ。あの刀は、俺がこの世界に目覚めてからあった刀だったからな。なにかあるのかも知れんな。興味は無いが。

「さて、では俺は急がねばならん。」

これからよろしく頼む、相棒。

刀を腰に携える。

「もう行くのかぁ。まぁ、なかなか楽しめたぜ。」
「ふん。ではな。」
「おう、さっさと世界を救っちまえよ。ハジメ。」
後ろ手を振りながら、自らの住処に帰るナーガ。
「無論だ。」
さて、まずは旧世界に行くとしよう。造物主、貴様を完膚なきまでに、叩き潰すためにな。

……
…

「まぁこのような事があったな。この刀に関してはな。」
「…そうか。龍の牙で…。すごいとしか言えんのぅ。」
そう言っているアリカを見ると、少々眠そうだった。
「今日はこれまでにしておこう。誰かさんが眠そうだしな。」
少々話が長かったか…。
「む？眠くなどないぞっ」
声を上げるアリカを抱きかかえ、寝室へ向かう。
「今日はもう、寝るとしよう。夜ももう遅い。」
「…ふむ。では、続きは今度聞こうかの。」
お姫様抱っこのためか、少々顔を赤らめながら笑みを浮かべるアリカ。

「そうだな。また今度だ。」

幕間５（後書き）

新しい刀ってどう手に入れたの？というリクエストがあったので書いてみました。まぁ大まかには考えていたのですが、ネギまの要素はゼロでしたので…。

原作どうしようか今だ考え中です。最近丸くなってしまった感が否めないので、過激にでもしてみようかなと考えたら、数話で麻帆良が全滅しました…。

引き伸ばし感がある幕間ですが、Ｇ－ｑａｚの構想が出来上がるまでもう少しお付き合いください。ではまた。

幕間６（前書き）

短いです。そして、アンケートすることになりました。詳細は文末まで。

幕間6

青年は父親に
姫は母親になる

幕間6
～誕生～

ー主人公ｓｉｄｅー
俺はあるところに向かい、王宮を走る。
目的の場所へと辿り着き、扉を開ける。
「アリカ、生まれたかっ？」
アリカに問いかける。

そんな俺の様子に、目をぱちくりさせるアリカ。
「ふふ。お主らしくないのぅ。そんなに慌てるでない。」
そう言って、胸に抱いている眠りに着いている赤子を、こちらに見せるアリカ。
「心配するな、元気な女の子じゃ。」
「はい。それに、アリカ様自身も健康体です。良かったですね。」
隣にいた主治医の女が笑顔で補足する。

「ふぅ。そうか。」
安堵しながら、アリカに近づく。
「ほれ、抱いてみよ。」
アリカから娘を受け取る。

軽い。だが、重い…な。
「くく、俺が父親になる日が来るとはな。」
壊れそうな娘を抱きながら、心から思ったことを呟く。
「ふふ。お主がそうしていると微笑ましいのぅ。」
アリカが微笑みながらこちらを見る。

「目元はアリカに似ているな。というより、女の子なのだからアリカに似て欲しい。」
「ふふ。うれしい事を言ってくれるのぅ。」

しばらく、娘の寝姿を見ていると、
「そうじゃ。名前は決めたのかの？」
アリカが聞いてきた。
「あぁ、娘ならばメアと名付けようと思っていたのだが。どうだろうか？」
単純に俺とアリカの名前からつけただけだが、それくらいシンプルな方が俺にはいい。
「なんじゃ。妾とハジメの名前からか。」
「…、良く分かったな。」
そう感心していると、アリカは顔を赤らめながら、
「…妾もそう名付けようと、思っただけじゃ。」
と答えた。

なるほど。

「…くっ。ははははは。」
「なっ、笑うところか？そこは。」
少々気恥ずかしそうなアリカが、少し怒ったように言う。
「いや、なんか可笑しくてな。2人それぞれ考えた名前が同じで、

理由も同じだとはな。」
「ふふふ。それもそうじゃな。」
2人で笑みを浮かべながら話す。

しばらく、会話が続いていると、ふと思い出す。
「そういえば、詠春の奴も子供が出来たそうだ。…お前とはちゃんとした旅行などは行っていなかったしな。ちょうどいい機会だ、行くか？」
「そういえば、そうじゃの。…行きたいのぅ。」
こちらに向けて笑顔で言うアリカ。
「ならば、1，2週間後に行くとしよう。しっかり体を休めておけ、アリカ。」
「意外と心配性じゃのぅ、分かったのじゃ。では、準備の方は任せたぞ？」
メアをアリカの腕に戻し、
「あぁ、了解した。」
と言って、準備をするために部屋を出る。

それから数日後、俺達は詠春のいる京都へと旅立った。

幕間６（後書き）

困ったときの原作。京都旅行に行きたいと思います。そして、子供が出来ましたね。アリカとハジメに。まぁ、特に問題ないかなぁとおもいました。

娘なのはあくまでこの作品の主人公がハジメだからです。といっても、一応息子としてそっちを原作編主人公にしたら面白いとも思ったのですが。どちらがみたいですかね？

というわけで、アンケートです。こなかった場合は自動的に娘です。？このまま娘で（たびたび登場するかな？）、ハジメが主人公のまま原作編へ。

？息子に訂正して息子が主人公の原作編へ、ハジメは完全裏方へ（もちろん登場はします）。ちなみに、息子のままでもメアの名前でいこうと思っていますが、こういう名前もいいんじゃないかというのも募集です。

アンケートは１１月１２日土曜の夜ぐらいまでを締め切りとします。なので、更新はその日までなくなると思います。一応ストックは作っておく予定なので１２日の夜に結構更新すると思います。

アンケート協力お願いします。ではまた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8391x/

信念を貫く者

2011年11月8日03時10分発行